

小さな自然再生サミット 2025 京都大会

～ みんなで考える「小さな自然再生」の次の一手 ～

開催報告



【日時】 2025年12月7日(日) 10:00～17:00

【場所】 京都大学宇治キャンパス 宇治おうばくプラザ

【主催】 小さな自然再生サミット実行委員会

【後援】 国土交通省、環境省、公益財団法人リバーフロント研究所

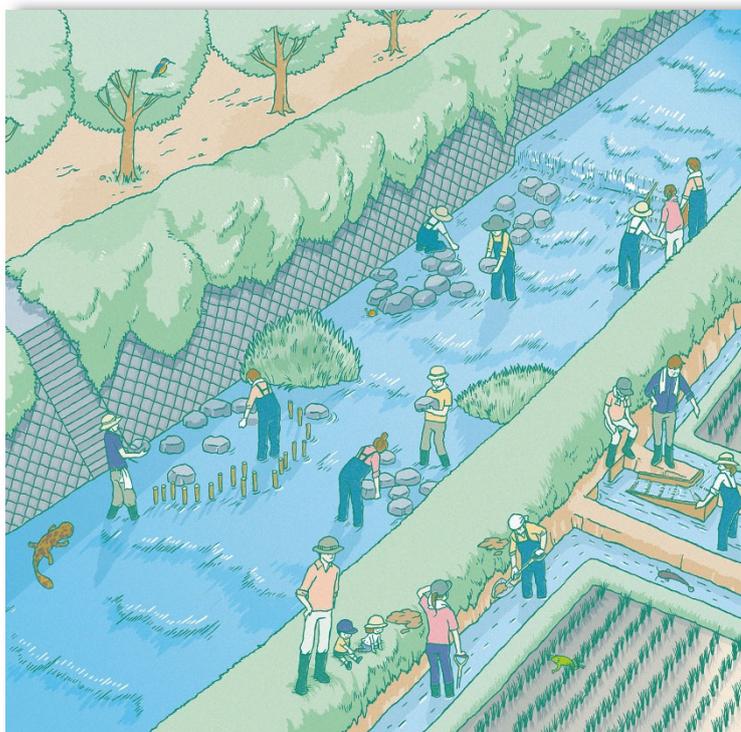
【協賛】 いであ(株),(株)伊藤園,(株)ウエスコ,王子ホールディングス(株),(株)KANSO テクノス,
共和コンクリート工業(株),(株)建設環境研究所,(株)建設技術研究所,(株)ジャッカル,
(一財)セブン-イレブン記念財団,(株)デプス,日本工営都市空間(株),
パシフィックコンサルタンツ(株),(株)北海道技術コンサルタント

■表紙のイラストについて

「サミット 2025 京都大会」のイラストは、「サミット 2019 神戸大会」のイラスト制作も担当頂いた実行委員の兵庫県立人と自然の博物館・三橋さんとイラストレーター・イザワイツハさんが作成しています。

7年間の小さな自然再生の積み重ねと小さな変化を探してみてください。

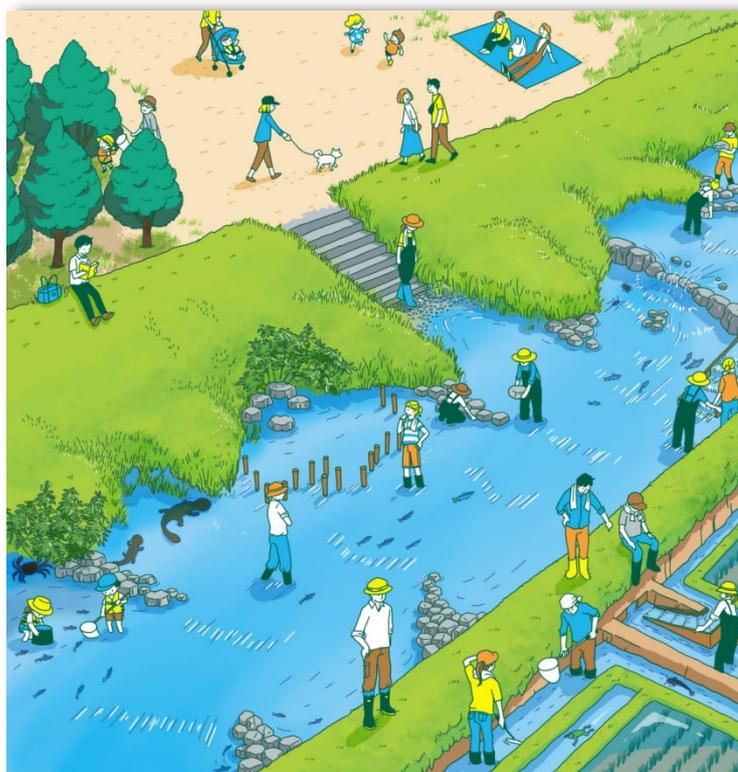
2019年1月
『サミット 2019 神戸大会』
イラスト



7年後



2025年12月
『サミット 2025 京都大会』
イラスト



小さな自然再生サミット 2025 京都大会

開催報告

2025年12月7日（日） 京都大学宇治キャンパス 宇治おうばくプラザ

はじめに

水辺で取り組む小さな自然再生の更なる深化と拡がりに向けて、全国で取り組む仲間が集い、相互交流を通じて今後の新たな活動や協働に展開していくことを目的に、「小さな自然再生サミット 2025 京都大会」を2025年12月7日（日）に京都府宇治市の京都大学宇治キャンパス・宇治おうばくプラザにて開催しました。

本サミットには、北海道から九州まで全国より集まった約200名にご参加をいただき、30地域の事例発表、事例発表者と参加者とのポスターや展示交流、さらに「小さな自然再生の次の一手を考える」をテーマとしたパネルディスカッションを通じて、小さな自然再生の技術や進め方、今後の方向性について議論を深めました。

この開催報告は、サミット参加者とともに学び議論した成果を、当日の写真とともに皆様にご紹介するものです。

本サミットにご後援、ご協賛いただきました団体関係者各位、事例発表者皆様、また全国よりサミットにご参加いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

2026年2月

小さな自然再生サミット実行委員会

目次

1. 開催概要	1
2. 開会	2
3. 全国事例発表	6
4. 事例発表者ポスター交流会	48
5. パネルディスカッション	51
6. 閉会	66
7. 参加者属性及び会場の声	68

参考資料

参考資料 1： 宮本和宏参議院議員祝辞	73
参考資料 2： RIVERFRONT Vol.93 巻頭言	74
参考資料 3： 新聞記事紹介	75



1. 開催概要

【日時】 2025年12月7日(日) 10:00~17:00

【場所】 京都大学宇治キャンパス 宇治おうばくプラザ

【主催】 小さな自然再生サミット実行委員会

【後援】 国土交通省、環境省、公益財団法人リバーフロント研究所

【協賛】

いであ株式会社, 株式会社伊藤園, 株式会社ウエスコ, 王子ホールディングス株式会社,
株式会社 KANSO テクノス, 共和コンクリート工業株式会社, 株式会社建設環境研究所,
株式会社建設技術研究所, 株式会社ジャッカル, 一般財団法人セブン-イレブン記念財団,
株式会社デプス, 日本工営都市空間株式会社, パシフィックコンサルタンツ株式会社,
株式会社北海道技術コンサルタント ※五十音順

【参加者】 約 200 名

【参加費】 無料

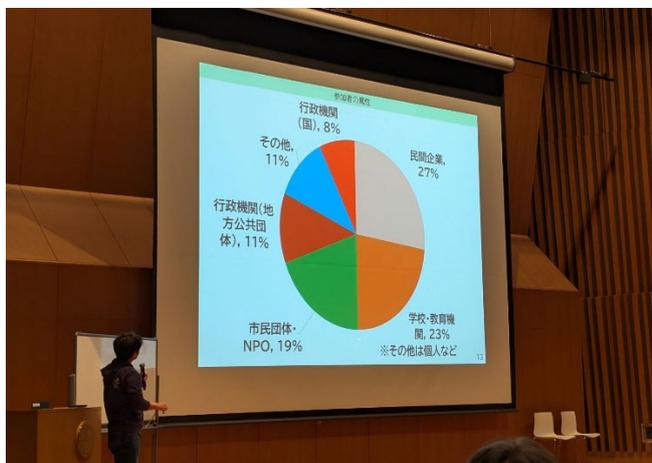
【プログラム】

10:00	サミット開会 (実行委員長挨拶、来賓挨拶)	@きはだホール
10:15-12:40	全国事例発表 (4分×30団体)	@きはだホール
12:40-13:40	昼食 & 事例発表者ポスター交流	@ハイブリットスペース
13:40-16:00	パネルディスカッション ~「小さな自然再生」の次の一手を考える~ ※終了後に参加者全員で集合写真	@きはだホール
16:10-17:00	茶話会	@ハイブリットスペース

2. 開 会

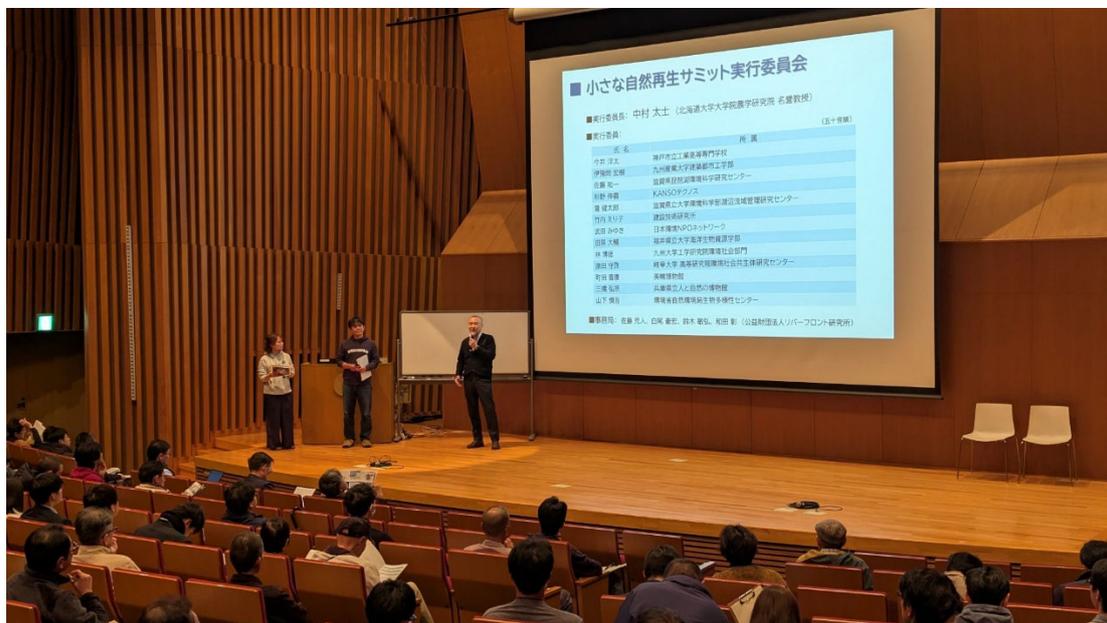
司会進行

本サミットの司会進行は、小さな自然再生サミット実行委員会より武田みゆきさん（日本環境 NPO ネットワーク）及び瀧健太郎先生（滋賀県立大学環境科学部）にお二人にお務め頂きました。



【1】小さな自然再生サミット実行委員会

主催者を代表して、小さな自然再生サミット実行委員会の中村太士実行委員長（北海道大学大学院農学研究院 名誉教授）よりご挨拶を頂きました。



<小さな自然再生サミット実行委員会 構成>

■ 実行委員長： 中村 太士 （北海道大学大学院農学研究院 名誉教授）

■ 実行委員：

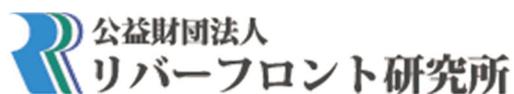
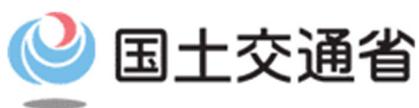
氏名	所属
今井 洋太	神戸市立工業高等専門学校
伊豫岡 宏樹	九州産業大学建築都市工学部
佐藤 祐一	滋賀県琵琶湖環境科学センター
杉野 伸義	KANSO テクノス
瀧 健太郎	滋賀県立大学環境科学部湖沼流域管理センター
竹内 えり子	建設技術研究所
武田 みゆき	日本環境 NPO ネットワーク
田原 大輔	福井県立大学海洋生物資源学部
林 博徳	九州大学工学研究院環境社会部門
原田 守啓	岐阜大学 高等研究院環境社会共生体研究センター
町田 善康	美幌博物館
三橋 弘宗	兵庫県立人と自然の博物館
山下 慎吾	環境省自然環境局生物多様性センター

【2】後援

後援団体を代表して、小島優様（国土交通省審議官）、奥田青州様（環境省自然環境計画課地域ネイチャーポジティブ推進室長）よりご挨拶を頂きました。



<後援>



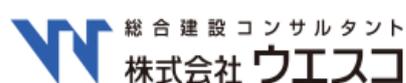
【3】協賛

協賛団体を代表して、野田武志様（一般財団法人セブンイレブン記念財団）よりご挨拶を頂きました。



<協賛>

(五十音順)

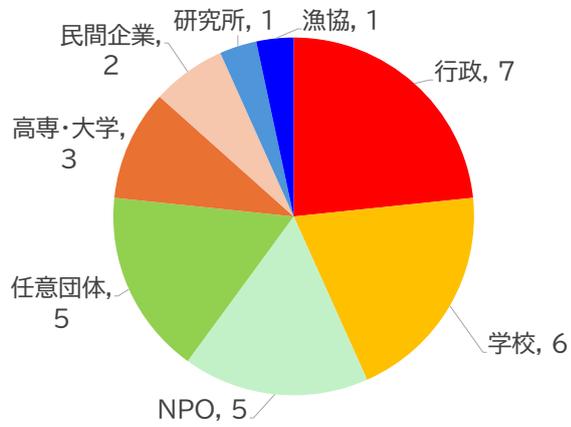


3. 全国事例発表 (30 団体)

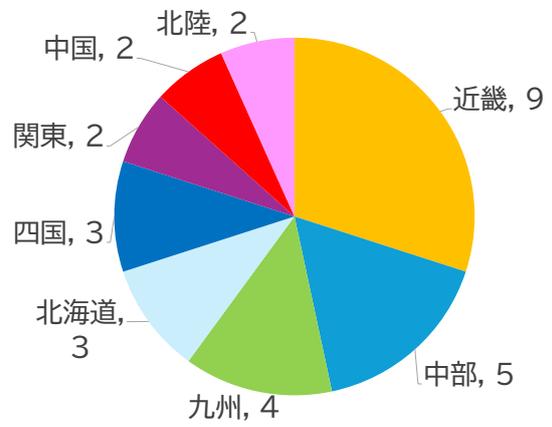
No.	都道府県	発表タイトル	団体名
1	北海道	サクラマスが遡上する都市河川 ～琴似発寒川の未来へとつなぐ産卵場所づくり～札幌工業高等学校土木科の挑戦	北海道札幌工業高等学校土木科
2	北海道	手づくり魚道の「出口」をどう見定めるか～北海道・三郎川魚道の17年	NPO法人えんの森
3	茨城	生き物を増やす釣り人の活動 in 霞ヶ浦 ～魚道研修会后、さらにパワーアップ！～	NPO法人水辺基盤協会
4	栃木	小河川の雑魚爆増！竹束でつくる雑魚の大人気越冬地	栃木県立馬頭高等学校水産科
5	長野	小さな流域治水 ～学校から見た学びの場づくりとしての小さな自然再生～	更北中学校ものづくり部理科班
6	長野	耕作放棄地のビオトープから生まれるネイチャーポジティブ	高山村立高山中学校
7	福井	福井県南川における可搬魚道(ポータブル魚道)によるアユ、カジカ類の遡上効果	福井県立大学
8	福井	水の道再生プロジェクト ～伝統技法(しがら、ボサ、石積み)による手しごと治水～	福井かひる山 風土舎
9	静岡	「小さな自然再生×自然学校」の取り組み～小さな自然再生の可能性を探る、芝川でのチャレンジ～	特定非営利活動法人ホールアース自然学校
10	静岡	二級河川瀬名新川 ～ご近所さん・大学生・ちょっと行政との協働による水辺の小さな自然再生～	瀬名新川★生き物育て隊(静岡県静岡土木事務所)
11	愛知	愛知のいい川づくり	愛知県建設局河川課
12	滋賀	家棟川にビワマスを取り戻せ！ ～本設魚道設置までの道のり～	家棟川・童子川・中ノ池川にビワマスを戻すプロジェクト
13	滋賀	滋賀県東近江市における農業排水路のエコアップ	株式会社IHI
14	滋賀	みんなで作る野洲川のアユの産卵場	近畿地方整備局琵琶湖河川事務所
15	京都	鴨川天然アユの壁問題と井桁魚道(＃魚道)	京の川の恵みを活かす会
16	京都	みんなの川塾 ～大手川の環境改善と流域学習～	京都府立宮津天橋高等学校フィールド探究部
17	大阪	淀川河口域の自然再生活動 ～石干見～	大阪市漁業協同組合
18	兵庫	福田川水系の生物多様性確保のための自然環境調査について	福田川クリーンクラブ
19	兵庫	現地研修会で清流づくり委員会と高校と県民局とのコラボに発展	千種川圏域清流づくり委員会
20	兵庫	丹波篠山市における「ふるさとの川づくり」への取り組み	ふるさとの川づくりワーキングチーム(丹波篠山市役所)
21	岡山	小さな村で始まった水域をつなぐ小さな自然再生	株式会社エーゼログループ
22	岡山	川ガキが 戻りつつある 日笠川	わけっこパーク
23	徳島	川遊びから、川づくりへ！ ～小さな自然再生で、みんなで行う川づくり文化をつくる～	NPO法人川塾
24	徳島	神山の先達とともに、鮎喰川にもう一度、鮎を！	一般社団法人神山つなぐ公社
25	香川	サケ・マス類の自然産卵促進に向けた可搬魚道開発の挑戦	国立高専機構香川高等専門学校高橋研究室
26	高知	幼稚園と保護者と技術者が合作する、園児専用里山体験フィールド「若草幼稚園 すくすくの森」since1989	学校法人若草幼稚園
27	福岡	グリーンインフラ論「唐の原川」での小さな自然再生の実践	九州産業大学
28	福岡	山田緑地で行う水辺環境の保全・再生 ～魅惑の湿地帯ビオトープづくりと外来生物駆除～	北九州市立山田緑地管理事務所
29	大分	温泉観光地の親玉、大分県別府から生き物と自然の魅力を発信～亀川プロジェクト「人と温泉と生き物と」～	NPO法人北九州・魚部
30	大分	治水・利水・環境の三方よし！由布院温泉の宮川再生プロジェクト	豊かな水環境創出ゆふいん会議

発表者の特徴

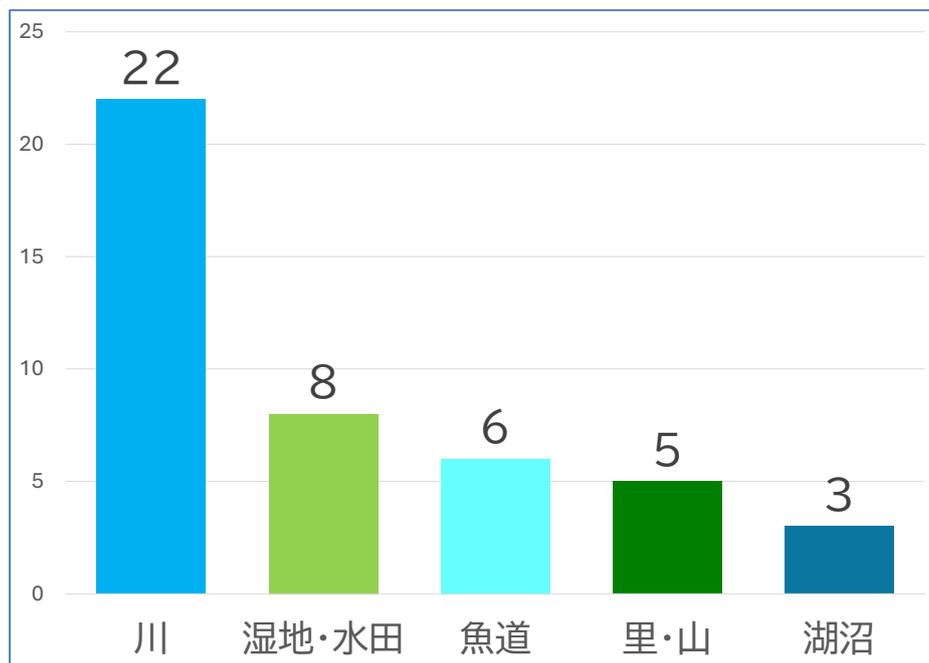
①所属



②地方構成



③活動フィールド (重複あり)



各発表者の様子



No.1 北海道札幌工業高等学校土木科



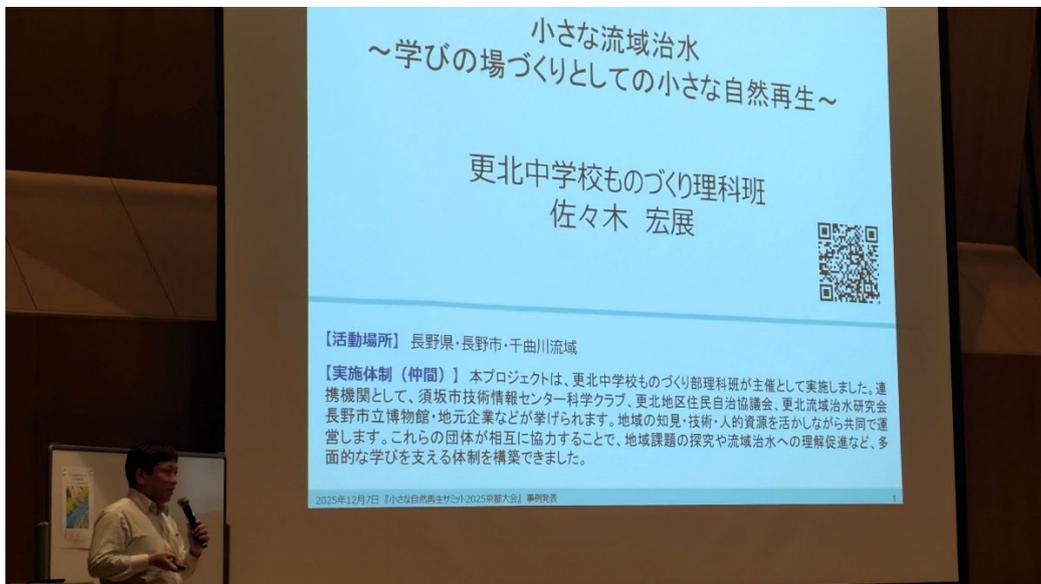
No.2 NPO 法人えんの森



No.3 NPO 法人水辺基盤協会



No.4 栃木県立馬頭高等学校水産科



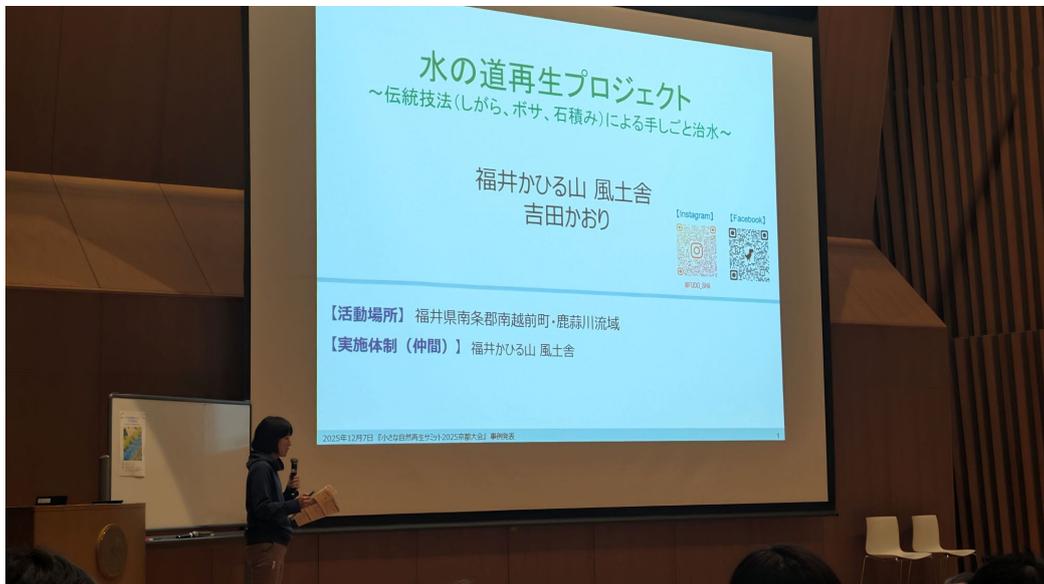
No.5 更北中学校ものづくり部理科班



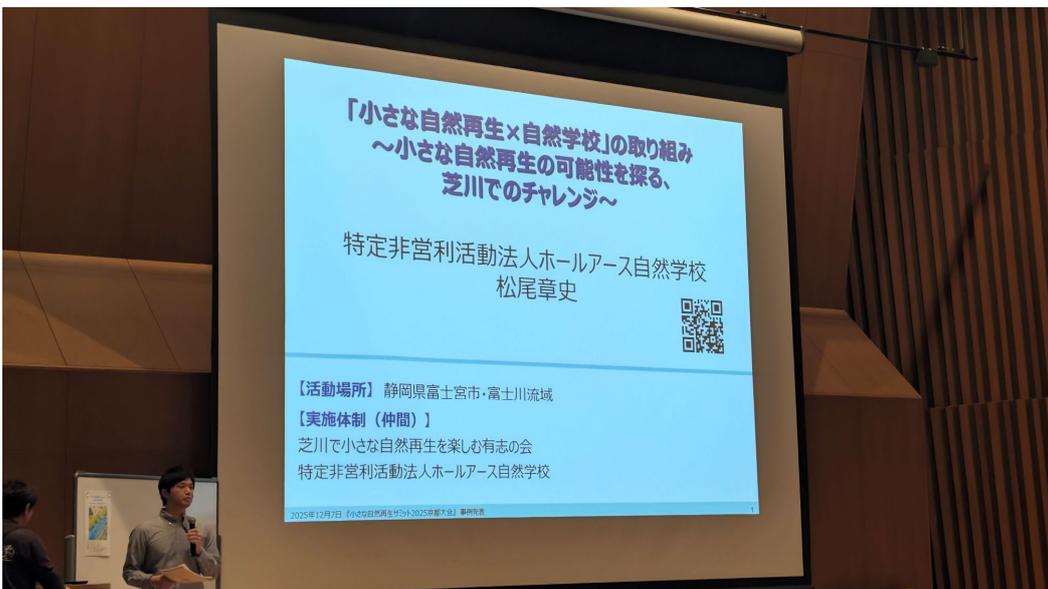
No.6 高山村立高山中学校



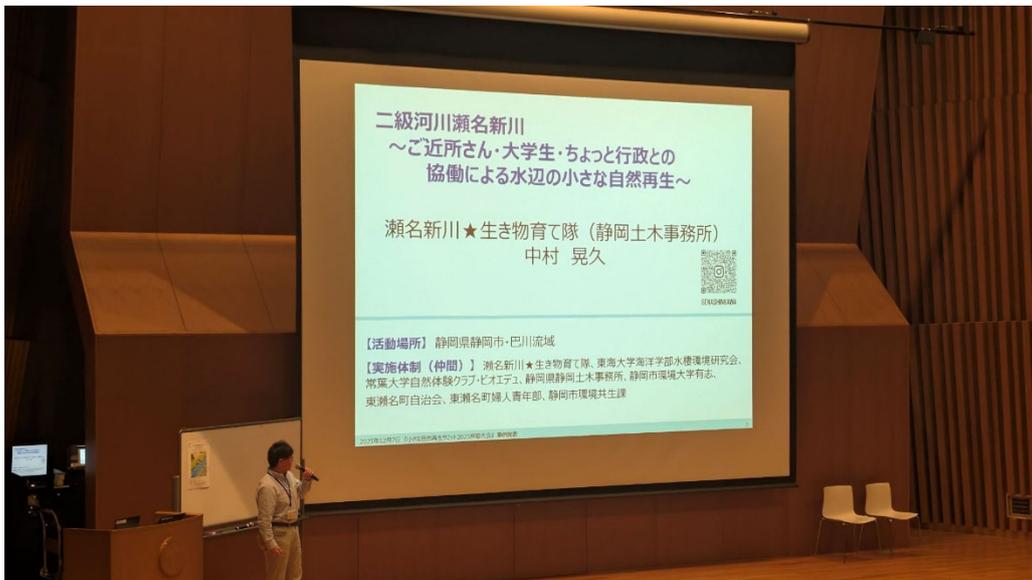
No.7 福井県立大学



No.8 福井かひる山 風土舎



No.9 NPO 法人ホールアース自然学校



No.10 瀬名新川★生き物育て隊（静岡県静岡土木事務所）



No.11 愛知県建設局河川課



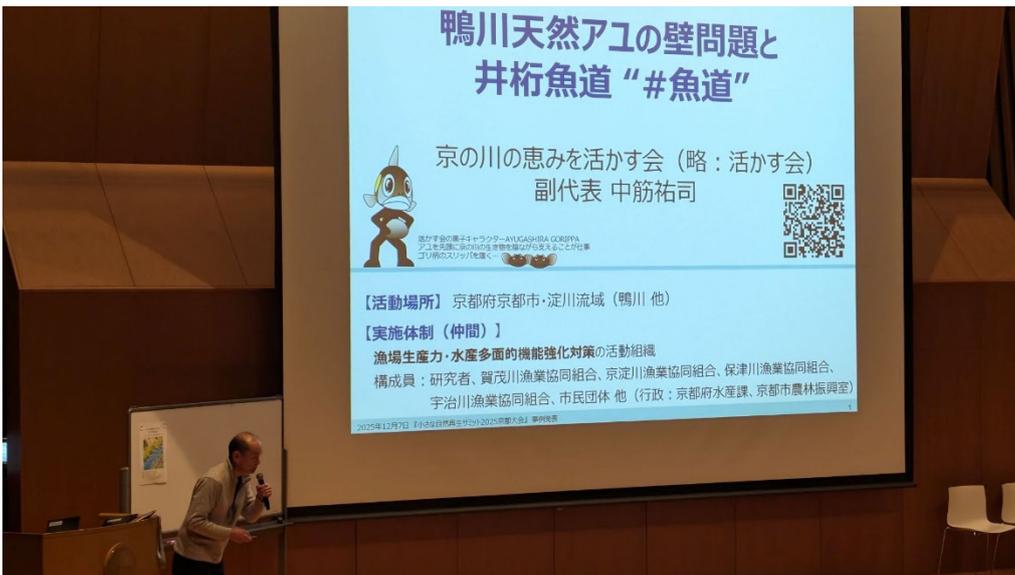
No.12 家棟川・童子川・中ノ池川にピワマスを戻すプロジェクト



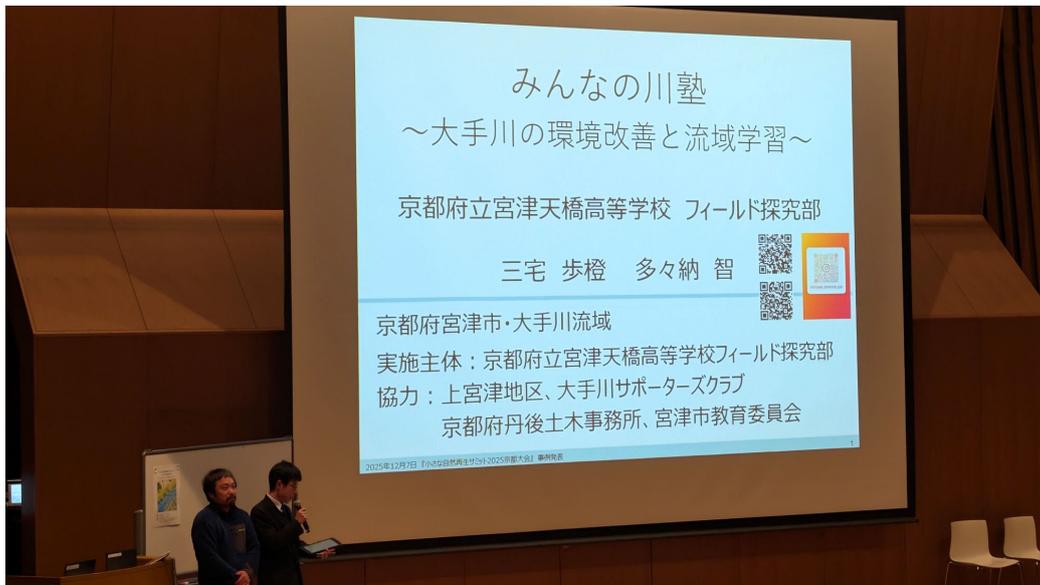
No.13 株式会社 I H I



No.14 近畿地方整備局琵琶湖河川事務所



No.15 京の川の恵みを活かす会



No.16 京都府立宮津天橋高等学校フィールド探究部



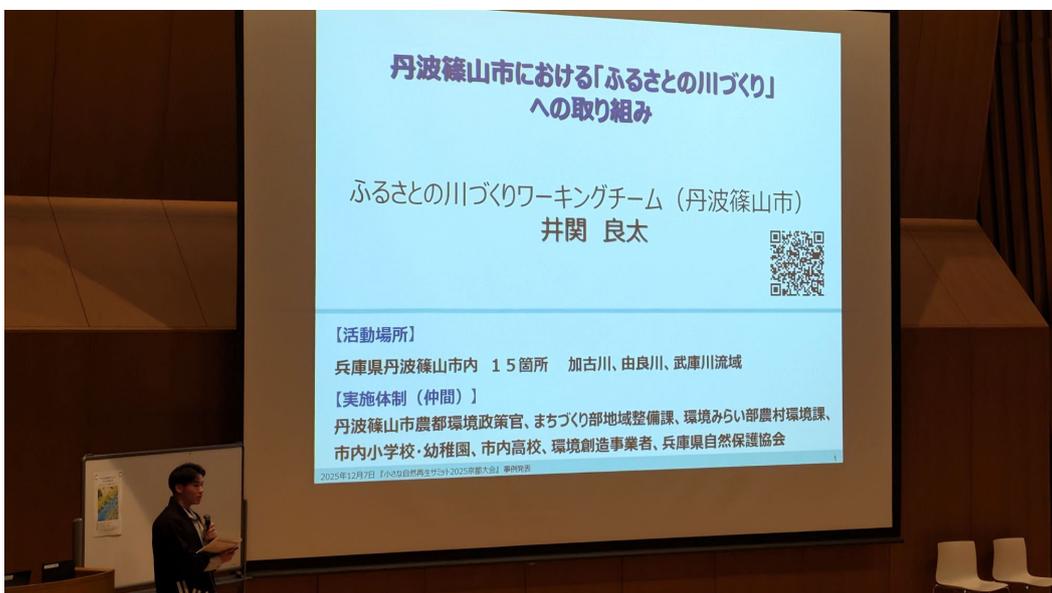
No.17 大阪市漁業協同組合



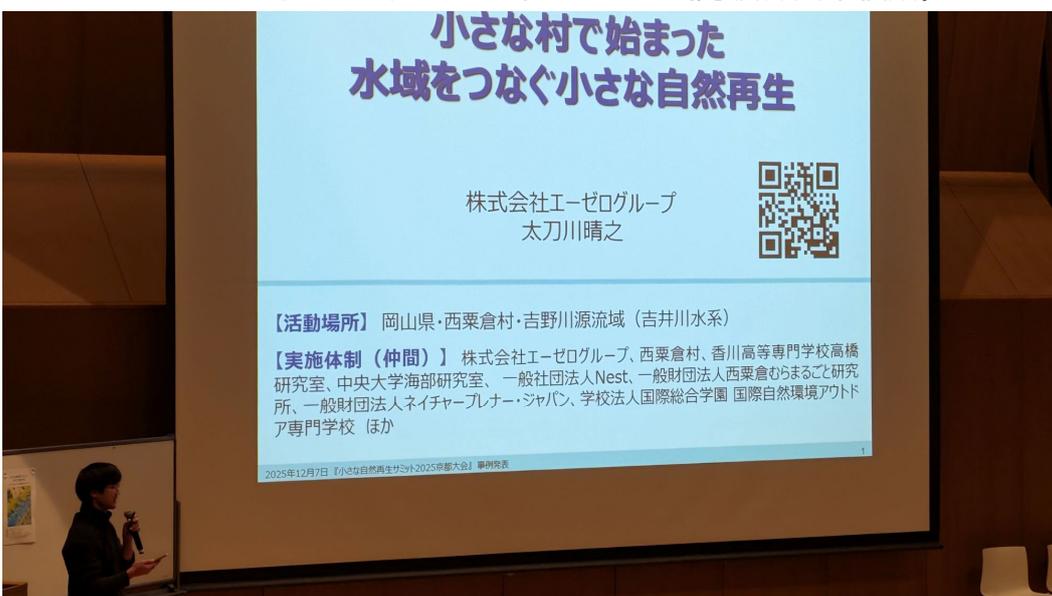
No.18 福田川クリーンクラブ



No.19 千種川圏域清流づくり委員会



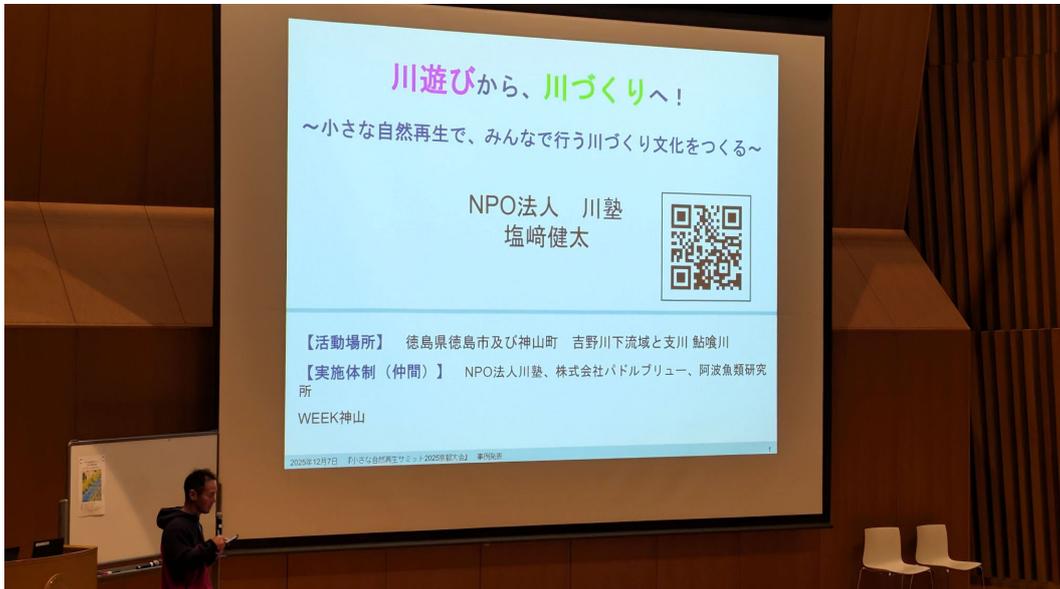
No.20 ふるさとの川づくりワーキングチーム（丹波篠山市役所）



No.21 株式会社エーゼログループ



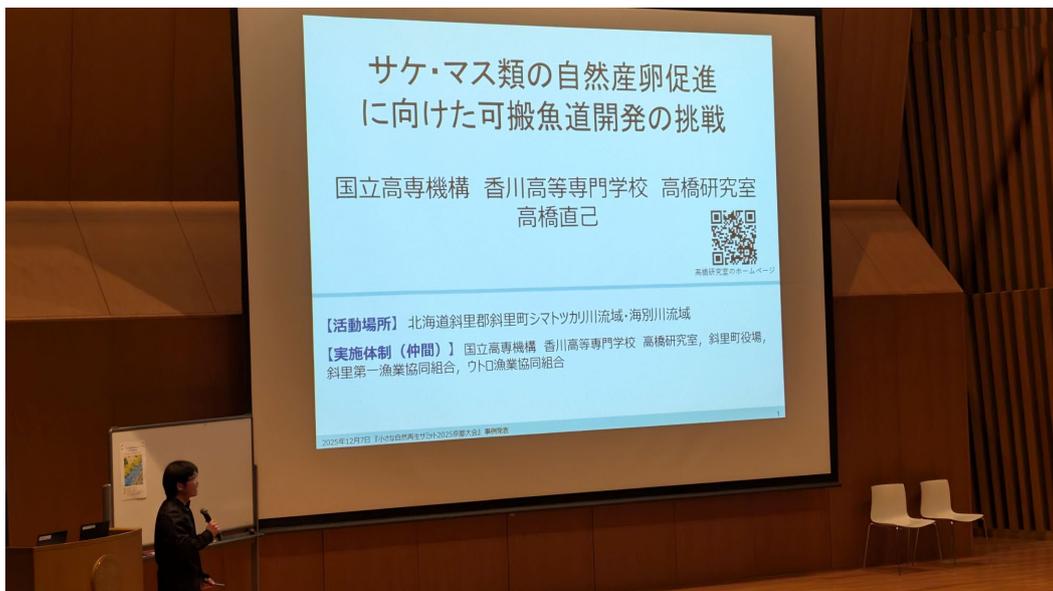
No.22 わけっこパーク



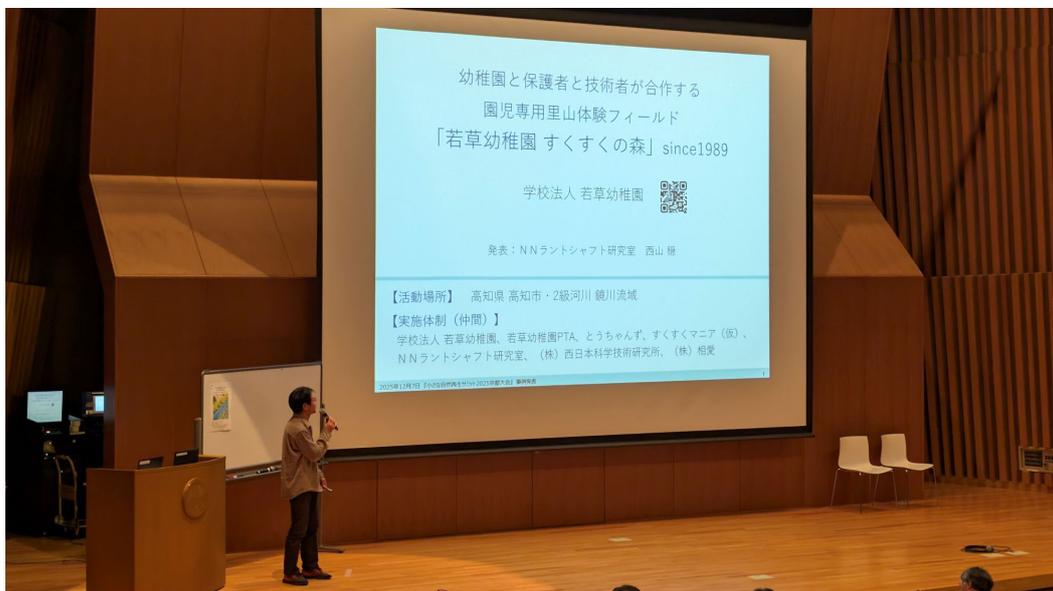
No.23 NPO 法人川塾



No.24 一般社団法人神山つなぐ公社



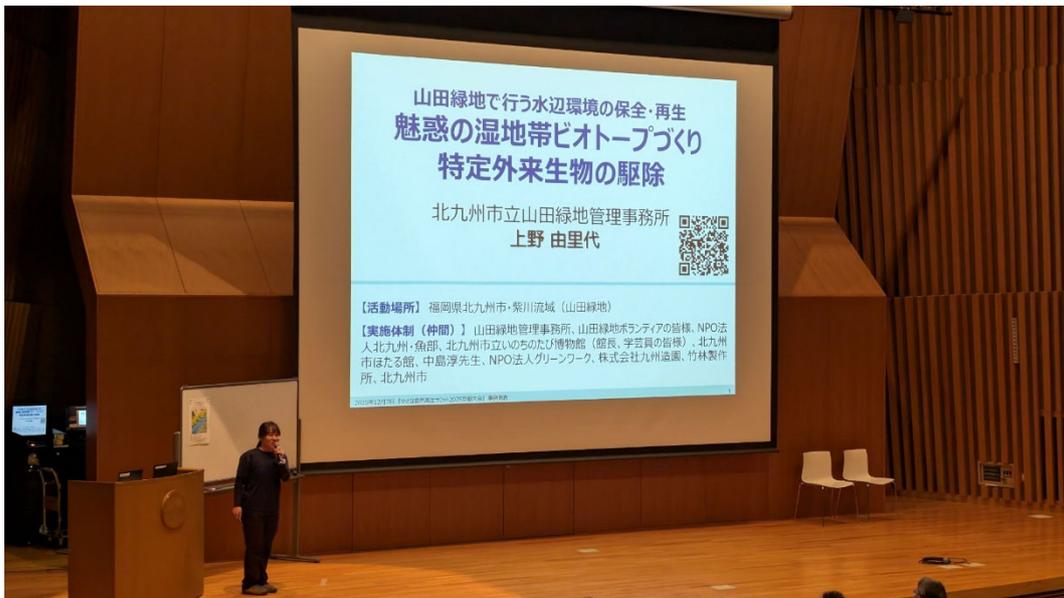
No.25 国立高専機構香川高等専門学校高橋研究室



No.26 学校法人若草幼稚園



No.27 九州産業大学



No.28 北九州市立山田緑地管理事務所



No.29 NPO 法人北九州・魚部



No.30 豊かな水環境創出ゆふいん会議

サクラマスが遡上する都市河川 ～琴似発寒川の未来へつなぐ産卵場所づくり～

北海道札幌工業高等学校土木科
中居 宙斗



【活動場所】北海道札幌市・新川水系琴似発寒川流域

【実施体制（仲間）】

北海道札幌工業高等学校土木科、株式会社北海道技術コンサルタント、札幌市豊平川さけ科学館、北海道空知総合振興局札幌建設管理部、SWSP・向井氏

公益財団法人河川財団による河川基金の助成を受けています。

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

1

①活動概要

都市河川の琴似発寒川は、治水を主な目的として整備が行われています。その結果、ところによっては川底の礫が流されたあと、上流から供給されず、サクラムスの産卵適地は限られた状態となっています。そこで、サクラムスの生態、河川環境、治水等を探究し、「自分たちでサクラムスの産卵に適した環境をつくる」ことを目標に研究をしています。

①【施工場所と施工法の方針の決定】

3箇所の帯工で施工を実施する
上流側から
1 箇所目…右岸側に礫を投入
2 箇所目…右岸側に礫を投入、木材で押さえる
3 箇所目…木材を入れる→次年度までに堆積するが検証



②【施工】

礫の移動と搬入



③



④【産卵の確認】



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

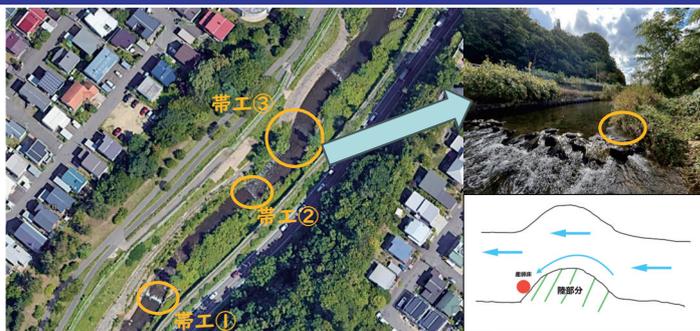
4



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと、得たことと今後の課題

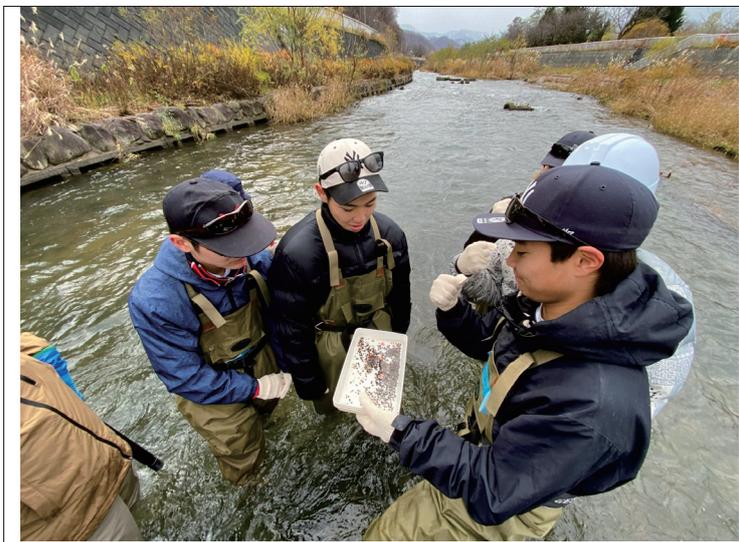


【研究を通して】

- ・帯工③では施工していない場所に礫がたまり産卵床となっていた！
- ・水を相手にするのは難しい。礫の流出や堆積は「流れの向き」や「地形」が大きく影響することが改めてわかった。
- ・同じ場所でも毎年変化があるので継続することで最適な産卵環境の構築を目指したい。

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

5



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

【やってみたい】

「琴似発寒川 札工河川ミーティング」

課題研究河川班の先輩方と現役生徒が集まり、ボランティア活動（河川清掃・改善活動）や、今の取り組みの報告、思い出話をする交流会を開催したい。

【感謝】

様々な方々に協力を頂き、探究することができた。「考えた事」や、「やってみたいことに挑戦させてもらっている事」に感謝しています。

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

6

「手づくり」の出口をどう見定めるか 北海道・三郎川魚道の17年

NPO法人えんの森
中川大介



【活動場所】 北海道浜中町・三郎川流域

【実施体制（仲間）】 NPO法人えんの森、浜中町、JA浜中町、認定NPO法人霧多布湿原ナショナルトラスト

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

- 風蓮川水系三郎川は酪農地帯を流れる流程約10kmの普通河川。飲み水と酪農用水を取る堰（1972年建造、堤高1.5m）が上流の産卵適地に向かうイトウなどの魚類の遡上障害になっていた。
- 高級アイスクリーム「ハーゲンダッツ」の原料となる高品質の生乳を生産しながら「自然と調和した酪農」を目指す酪農家が、環境再生運動「緑の回廊」の一環で、2008年に浜中町、JA浜中町、NPO法人霧多布湿原ナショナルトラストとともに魚道設置委員会を設立。資金と労力を出しあい、ユニークな形状の魚道を「手づくり」した。
- 設置後は魚の遡上が容易になり、上流でイトウの産卵床が確認された。魚道は環境学習にも使われ、地域の結束力を示すシンボルとなった。
- 川砂を使った土のうや丸太など地域にある自然素材を使い、あえて「とどき壊れる」構造にしたため、観察と補修が必要。住民の注意を引き付け、環境への関心を高める役割を果たしてきた。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4



2008年10月に完成した三郎川手づくり魚道。魚類の遡上障害となっていた取水堰の下流に、木材や土のうなどで造った「三角水制」を4個並べて堰上げする構造

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 「とどき壊れる」構造だけに大雨で何度か壊れ、2014年にコンクリートを使って大規模に補修した。酪農家で立ち上げたNPO法人えんの森が魚道設置委員会の事務局となって維持管理にあたり、2025年10月にも小規模な補修を行った。各団体の拠出金で維持管理資金は確保できている。
- ただ、設置から今年10月で17年。浜中町では離農と大規模化が進み、コミュニティワークに加わる人が大きく減った。時間の経過と深刻な人口減少に伴う住民・関係団体の数や関心の低下が、魚道の維持管理を困難にしている。
- 2025年春から魚道設置委員会で、魚道の今後の在り方の協議を始めた。①メンテナンスフリーの簡易な魚道への置き換え②完全な撤去③そのまま成り行きに任せる—の三つの選択肢が想定される。
- 設置時点で「維持困難になった、その先」を考えていなかった。関与する人が減る中で、結論を出して対処していかなければならない。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



2025年10月の魚道補修作業。大雨で損壊した後の2014年に大規模補修し、右岸側の三角水制1個とコンクリートを使った「導流堤」で堰上げする構造となり、これを補修しつつ維持している

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

- 2026年中には魚道の取り扱いについて結論を出し、置き換え／撤去といった作業を実行に移したい。関係団体や住民、環境に関心を持つ人に広く呼び掛けて、作業に加わってもらいたい。
- 「小さな自然再生」に取り組む方々が、プロジェクトの「出口」をどのように見定めているか知りたい。開始から時間がたち、かかわる人の数や関心が低下した際に、どのようにプロジェクトを維持するか／終わらせるか、実際に取り組んだ方の経験をお聞きたい。
- 魚道設置の経過や、魚道の手づくりの意義については、拙著『水辺の小さな自然再生 人と自然の環を取り戻す』（農文協、2023年）で詳述した。今後の協議経過や改修または撤去についても何等かの形でまとめて、「小さな自然再生」に取り組む方々の参考資料としたい。



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

霞ヶ浦で生き物を増やす釣り人の活動

～ 現地研修会後の取組みと今後の展望 ～

NPO法人 水辺基盤協会

小野 正人



【活動場所】茨城県 稲敷郡 阿見町 他・霞ヶ浦流域

【実施体制(仲間)】NPO法人 水辺基盤協会

日本大学理工学部 安田陽一教授, 天海建設(株)

国土交通省 霞ヶ浦河川事務所, 霞ヶ浦導水工事事務所,
茨城県 霞ヶ浦環境科学センター, 土浦市, 阿見町, 美浦村

釣り人が居れば水辺は綺麗になる。



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

①自慢したいこと、強みなど

活動の原点は、『きれいなミズで釣りがしたい!』&『霞ヶ浦への恩返し!』

■ 廃止になりかけた種生浄化施設を復活! ～新たな価値を創造～

- 2017年10月から2回の活動を8年間続け、荒れ果てた施設が見事に復活! 生き物もたくさん増えた!
- 水路の多自然化や再湿地化により、生物多様性・繁殖環境が向上!
- 環境学習(釣り教室など)を行い、施設の利用価値を高めた!



■ プロ釣り集団の活動だからこそ!

- ボーズなし! 絶対に釣らせる釣り教室! (ライフジャケットもね)
- 釣り人だからわかる魚の気持ち! (笑)
- 釣り人だから魚を増やしたい! 釣り文化も伝えたい!

■ 令和6年度 手づくり郷土賞(国土交通大臣賞)受賞!

- 霞ヶ浦の豊かな水辺環境の再生を目指した種生浄化施設での活動を評価していただきました。

■ 第27回 日本水大賞(環境大臣賞)受賞!

- 釣り人の思いから始まった30年の清掃活動とその後の環境保全活動を評価していただきました。

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表



学びと体験を楽しむ!

7/12 日本大学・安田教授と一緒に魚道の改良

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

1. 活動の参加者や会員を増やしたい!

- いずれ訪れる理事長やコアメンバーの世代交代
- 担い手確保や人材育成の促進をどのように?

2. もっと活動資金を確保したい!

- 助成金の申請ってけっこう手間にかかると。(1.にも関連しますが、活動の対価が必要!)

3. 専門知識がちよっと不足。。。

- そもそも、生態学、生物、水環境等々に関する基礎知識がそもそも不足気味。。。

4. 関係機関等とのコミュニケーション向上!

- お役所は担当者がかわると対応が変わる場合も。。。

5. さらにこの場所の存在(環境)価値を高めたい!

- 『自然共生サイト』への登録ってどう? 他にも何かある?
- 場や活動の価値を高めることで、PRのネタになるか?

- 楽しいと思ってもらえること
- 魅力を感じてもらえること
- 負担にならないこと
- 効果的な広報・PR手法?
- 中高生や大学生の参加?
- 助成金申請先や工夫点?
- 企業から連携や支援を頂く方法?
- コーディネーター?
- アドバイザーの確保?
- コミュニケーションの工夫?

上記につながる?

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

5



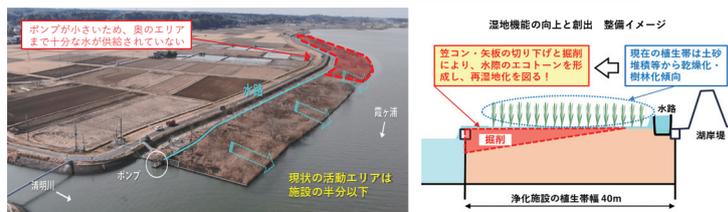
最高の笑顔!

6/14 ファミリー釣り教室

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

③今後コラボしたい“こと”や“人”

1. さらに湿地を拡大、生物多様性の質と機能向上など、やりたいことは山盛り!



- 霞ヶ浦の湖岸帯は減少傾向が止まらない! この場は自然には無くないので、質の維持・向上を図ることでより貴重な場になり得る。

2. 『小さな自然再生』を大きなムーブメントに!?

- 行政各部署、学校関係者、企業、団体、農業・漁業者、市民など、あらゆる関係者との意見交換や発表の場

【キーワード】 霞ヶ浦の水環境の変遷、自然を維持するには人の力が必要、流域総合管理、生態系サービス、ジブゴト、種生帯(エコトーン)減少、フカサギ、水質、水利用、ゴミ、歴史や文化、環境学習、霞ヶ浦導水...

⇒ 幅広い情報収集, 課題の共通理解, 活動のきっかけづくり, などを期待
知る(視野を広げる) わかる(認め合う) 行動する(連携する、刺激あう?)

★ 流域、沿川住民の皆様が、霞ヶ浦の生態系サービスを『ジブゴト』として意識して行動!

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

6

小河川の雑魚爆増！ 竹束でつくる雑魚の大人気越冬地

栃木県立馬頭高等学校 水産科
佐々木 慎一



馬頭高校HP 東京水産振興会HP

【活動場所】 栃木県那珂川町・那珂川流域

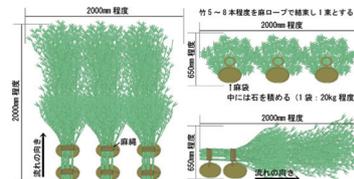
【実施体制（仲間）】 栃木県立馬頭高等学校水産科、東京水産振興会、
国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産技術研究所（坪井 潤一氏）、
栃木県水産試験場、栃木県鳥山土木事務所

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

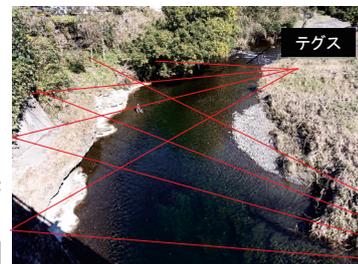
1

①自慢したいこと、強みなど

- ①竹を束にして沈める ②黒テグスを張ってカワウの侵入を防ぐだけ
- 竹束を沈める→魚を集める→狭い範囲でカワウを防ぐことが可能
- 支流で多くの個体が越冬→親魚数が増える→個体数増加
- 費用が安い（麻縄、麻袋、流失防止用ロープ、テグスのみ）
- 設置も容易（4人で約3時間）



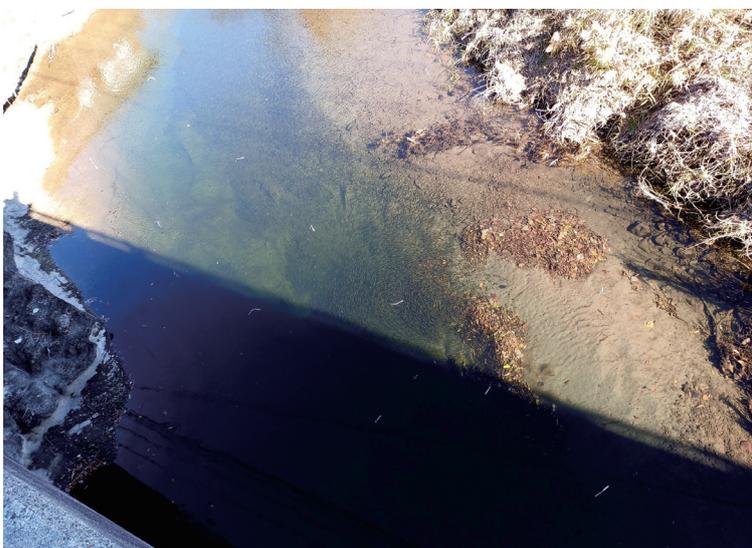
11月～3月くらいまでの期間沈める



黒テグスが効果大 出来るだけ多く張る

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4

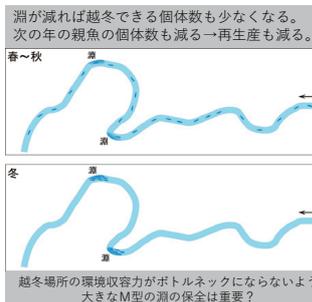


2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 河川の堆積土除去工事や護岸などで雑魚類の越冬に適した大きな淵が少ない。→支流の魚が下流に下ってしまい過疎化
- コイが数少ない良い淵を占拠すると雑魚が越冬できない。（競合）
- 水深の大きな淵、反転流、カバーの存在が越冬適地の条件？



淵が減れば越冬できる個体数も少なくなる。次の年の親魚の個体数も減る→再生産も減る。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



コイが竹束を占拠した2021年は雑魚が激減。2022年はコイを間引きたところ雑魚が大量に越冬。間引きたコイの胃内容物からは雑魚類が出てきた。コイが多くいる淵では雑魚類は越冬しない？コイが増え過ぎる×



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

竹束を使った越冬地づくりの普及

- 全国の内水面漁協、小さな自然再生に取り組む団体に広めたい！（竹束→占用許可、テグス→一時使用許可 河川管理者の理解）
- 中小河川や農業用水路、ため池、ビオトープ池などでも効果的？
- 柴漬け魚とほぼやっていることは同じなので止水でもおそらく使える。

上中流域の瀬と淵と巨石の保全活動
（多自然川づくりの普及）

- 上中流域の魚類の保全のためには平面だけでなく、瀬と淵と巨石など河床環境がとても重要。
- 希少種の保全も大切だけど…普通種がたくさんいるいい川づくり。
- 巨石を使った見試的な施工の事例を増やす。



上中流域の内水面漁場に重要な瀬と淵と巨石のはなし

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

小さな流域治水 ～学びの場づくりとしての小さな自然再生～

更北中学校ものづくり理科班
佐々木 宏展



【活動場所】 長野県・長野市・千曲川流域

【実施体制（仲間）】 本プロジェクトは、更北中学校ものづくり部理科班が主催として実施しました。連携機関として、須坂市技術情報センター科学クラブ、更北地区住民自治協議会、更北流域治水研究会、長野市立博物館・地元企業などが挙げられます。地域の知見・技術・人的資源を活かしながら共同で運営します。これらの団体が相互に協力することで、地域課題の探究や流域治水への理解促進など、多面的な学びを支える体制を構築できました。

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど



水防の歴史
更北の地域は自治的な技術の積み重ねがある

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4

河川の合流地点・旧流路・水がたまる場所に位置づく耕作放棄地



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

教員は異動がある。地域が学びの場づくりメニューとして、小さな自然再生が普通になるにはどのような条件が必要なんだろう？

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5

探究地図（今風にSTEAMとかで語ってもよいと思う）

生徒の好奇心のベクトルは様々。小さな自然再生という概念で包摂

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”



- 信州やまほいくとコラボ
- 保育園・幼稚園などが取り組む小さな自然再生図鑑づくり
※遊んでいたら、それが自然再生になった?!

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

耕作放棄地のビオトープから生まれる ネイチャーポジティブ



高山村立高山中学校
今田 晴美



【活動場所】長野県上高井郡高山村・千石田んぼ
【実施体制（仲間）】高山村立高山中学校、中山田耕作組合
小宮春平さん(福岡県・鳥取県生物多様性アドバイザー)
保全団体「わかぜん」、公立鳥取環境大学生物部

①自慢したいこと、強みなど

- 取耕作放棄地に自らビオトープをつくる稲作農家の皆さん
- 保全のスペシャリストとの連携
小宮春平さん、「わかぜん」の皆さん
公立鳥取環境大学生物部の皆さん
- 中学生による里山環境の保全活動



立場や世代を越えた協働的**生物多様性保全**
ネイチャーポジティブ



山田牧場

高山中学校



中学生による
千石ビオトープでの保全活動

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 困難なアメリカザリガニ防除
- 地域住民、村民への普及啓発方法
- 保全活動の継続



千石・仲沖保全向上活動組織
この場所は「ビオトープ」として!
メダカやドジョウやカエル達が生息しています
ビオトープとは：生物が自然な状態で生息している空間
中山田耕作組合



マルタニシ(NT)と
クロゲンゴロウ(NT)



アカハライモリ(NT)



マルガタゲンゴロウ(VU)
特定第二種国内希少野生動物植物種



アメリカザリガニ
条件付特定外来生物



小宮春平さん

コミヤの生物多様性に
関する一考察
中山田耕作組合
http://www.youtube.com/@ariake538

③今後コラボしたい“こと”や“人”、今後の展望

- ビオトープを含む里山全体の保全活動
- 自然共生サイトへの登録
- 子どもと大人を繋ぐ橋渡し



福井県南川における可搬魚道（ポータブル魚道）によるアユ、カジカ類の遡上効果

福井県立大学 海洋生物資源学部
田原大輔
香川高等専門学校 建設環境工学科
高橋 直己

【活動場所】 福井県小浜市・おい町、南川流域

【実施体制（仲間）】 香川高専高橋研究室、おい町、若狭河川漁業協同組合

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

- ポータブル魚道でアユ汲み上げ放流中止⇒漁協との連携強化
- アユだけでなく、**落差遡上弱者のカジカ類**も遡上できていた！
- カメも利用していたこと⇒水生生物の移動経路に貢献！



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4

漁協によるアユ汲み上げ放流～春の風物詩～

高齢化した河川組合には
重労働
いつまで続けられるのか？

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 増水時の耐久性
- 水量増減に合わせた維持管理
- 恒久魚道の設置・改良に向けての取り組み



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5

ポータブル(V型可搬)魚道設置
⇒汲み上げ放流中止

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

- 設置条件の見極めが最重要！
- アユだけでなく多くの魚類・水生生物にも有効
- アユが遡上できず滞留している堰はありませんか？

2024アユ遡上回復：V型魚道（香川高専共同研究）



4/7～6/17；長さ3m、幅30cm、設置角度20度

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

水の道再生プロジェクト

～伝統技法(しがら、ボサ、石積み)による手しごと治水～

福井かひる山 風土舎
吉田かおり



【活動場所】 福井県南条郡南越前町・鹿森川流域

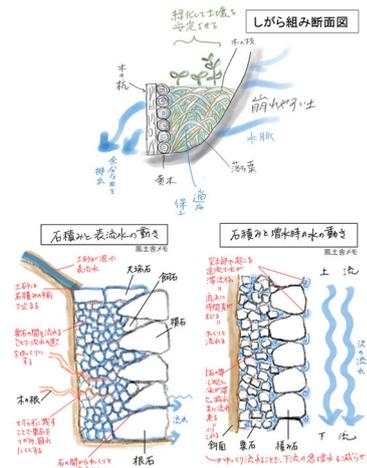
【実施体制(仲間)】 福井かひる山 風土舎

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

① 自慢したいこと、強みなど

- 山林が荒廃している状況下で自然界と人の営みのバランスをとりつつ、安全に暮らしをゆける里山にするため、小さな治水に取り組んでいます。
- 人口減少が著しい中山間地域では、今後、住民の暮らしを守るための大規模な工事が難しくなっていくとされます。**自分たちの手でできること**として、低コスト・住民主体で実践できる技術が鍵になってくると考え、学びの場を作っています。
- 水を「止める」のではなく**「いなす」**ことに主眼を置いた伝統工法“しがら組み”、“ボサ置き”、“石積み”をWS形式で作り、緑化も図っています。
- もし崩れたとしても、自分たちで補修・改良でき、暮らしの中で無理なく続けられるのが仕事の強みです。



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4



取り組み前の状況

② 知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 取り組みに際して知りたいこと
 - ・活動場所の自然環境の現況(植生、生物相、地質、地形など)を把握し、モニタリングもしていきたいが、その手法がわからない。
 - ・どうしたら町で暮らす人や地元住民が関心を持ち、「自分ごと」として関わるようになるか。
- 課題
 - ・取り組みのための資金が不足している。
 - ・一緒に活動してくれる仲間を増やしたい。
 - ・この活動をより多くの人に知ってもらいたい。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



石積み

しがら組み

③ 今後コラボしたい“こと”や“人”

- 森や山に関心を持つ入口として、ワークショップとは別に「南えちぜん森のがっこう」と題してイベントを開催しています。間口を広げるため、それぞれの分野の人を講師・協力者として迎えてコンテンツを増やし、森から得られるものを使って何かを作る、食べる、楽しむなど、多様な場を設けていきたいと考えています。
- 手しごと治水は、過疎地が増え、かつ災害が多発している日本中で役に立つものです。風土舎で学んだ方々と連携しながら、活動を全国に広げていきたいと考えています。



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

「小さな自然再生×自然学校」の取り組み ～小さな自然再生の可能性を探る、 芝川でのチャレンジ～

特定非営利活動法人ホールアース自然学校
松尾章史



【活動場所】静岡県富士宮市・富士川流域

【実施体制（仲間）】

芝川で小さな自然再生を楽しむ有志の会
特定非営利活動法人ホールアース自然学校

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

● 取組の概要

2025.10.21（火）10:00-17:00

・環境教育プログラム化を念頭に置いた小さな自然再生活動
→魚プラステーションづくり、バープ工づくり体験、水ろ過実験など

● 効果

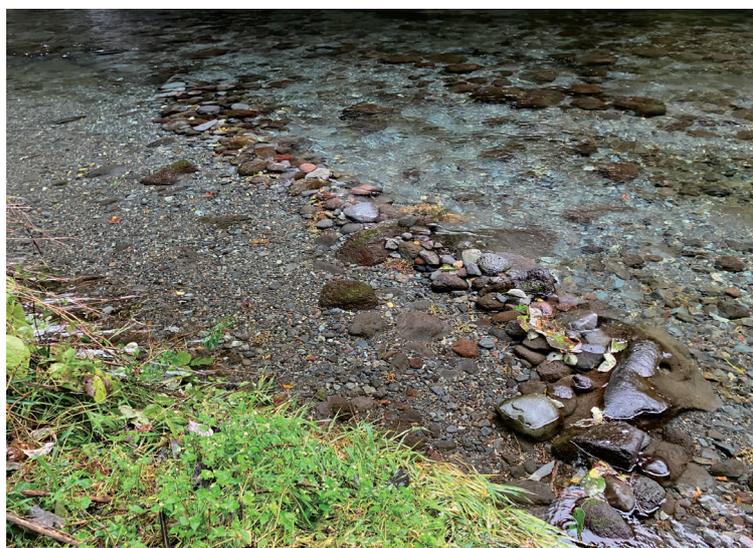
・有志の会のメンバーで、環境教育プログラムを検討することに
・企業の方と、プログラムのトライアルを検討することに

● 自分たちの強み

・芝川での自然体験の提供
→安全管理技術やプログラムノウハウの蓄積
・企業や行政との連携実績
→環境教育プログラムのスムーズな試行、社会実装

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

4



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

● 取組に際して知りたいこと

・小さな自然再生を安全に、効果的に進めるための資材・道具
→各地で取り組まれている皆さんが小さな自然再生を進める上で
「これは必須！これは使える！」という道具を教えてください

● 直面している課題や壁、解決したい困り事

・地域のキーマンや関係者に、取組を理解して頂く際のポイント
→地域「外」の方々に参加頂けることが多い一方で、
地域「内」のご関係者にご参加頂けていない

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

5



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

● 今後こんな取組みをしていきたい

・小さな自然再生活動の、環境教育プログラム化！

● 今後こんな専門家とコラボしてみたい

・小さな自然再生×環境教育の効果を計測・評価して頂ける方！

● こんな仲間を巻き込み一緒に取組みたい

・体験プログラム化するプロセスを楽しみながら一緒に頂ける方！

ぜひ一緒にさせて頂けると嬉しいです！
富士山の麓・芝川でお待ちしています♪

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

6

二級河川瀬名新川

～ご近所さん・大学生・ちょっと行政との
協働による水辺の小さな自然再生～

瀬名新川★生き物育て隊（静岡土木事務所）
中村 晃久



【活動場所】 静岡県静岡市・巴川流域

【実施体制（仲間）】 瀬名新川★生き物育て隊、東海大学海洋学部水棲環境研究会、
常葉大学自然体験クラブ・ピオエデュ、静岡県静岡土木事務所、静岡市環境大学有志、
東瀬名町自治会、東瀬名町婦人青年部、静岡市環境共生課

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

- 1982年（小6）道路工事で瀬名新川が無くなる！と聞き、憤慨。
- 1989～93年（京都で大学生）鴨川に感化。卒論「川と人との関わり」。ただ、多自然型川づくりは1人ではムリ→川から離れSEに。
- 1996年多自然型川づくりⅢを読み退職。1998年静岡県土木へ
- 2006年 小1長男、年中次男と改修後初めて瀬名新川へ入る→カワコナとザリガニ、スミウギヨリ発見。川は減んでいなかった！
- 2007年 庵原川ワークショップ 石倉カゴへ続く→瀬名新川でもやりたい！
- 2011年 小学校で長尾川たんけん隊実施→瀬名新川でもやらねば！
- 2023年 瀬名新川・河床掘削工事で再び生き物ピンチ！？
お向かいに住むKくん(中3)に多自然誘うとOK→1人ではない！
近所(12組)の親子も誘って、「瀬名新川★生き物育て隊」結成！
助っ人東海大、常葉大生と「水辺の小さな自然再生」実施！
- 2024年 全国多自然川づくり会議出場、しずおか川自慢大賞受賞
県、市とリバーフレンドシップ締結→自治会(流域住民)もバックアップ
- 2025年「自然再生」でご近所の交流も活発に→「まちづくり」へ！

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4

瀬名新川★生き物育て隊（ある日の）メンバー



R7-09-20 第2回水のおまわりさん（生き物調査）とゴミ拾い

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 水制工やバープ工をしても、河床に砂礫の土砂がたまり、平坦な河床になってしまう。何かいい方法はないか？
- 川に隣接した土地の護岸を壊して遊水地にしたいがその手法は？
- 瀬名新川を紹介する「瀬名新川図鑑」を発行したいが、どんなことに気を付けた冊子にするのが良いか？お金はどのくらいかかる？
- 現在は管轄する県静岡土木事務所に勤務しているため、多自然川づくりのアドバイス（目を光らせている！？）ができるが、異動した後は、また多自然川づくりが進まない可能性が高いがどうしたらよいか！？

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



R7.7.26 ご近所のお母さんと
水制(寄せ石)工を実施→日常に

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

- 瀬名新川クラスの小河川で小さな自然再生をやっている団体、専門家と情報交換をしたい。
- 産官学民のうち、産とのコラボができていないので、産とのコラボをしたいのですがどうしたものかと。
- 「瀬名新川図鑑づくり」で参考になる団体の方とつながりたいです！
- ゲンジボタルの復活を企てているので、参考になる団体の方とつながりたいです！
- 巴川流域治水として隣接する畑を遊水地兼せせらぎ公園にしたい→水辺と陸地をつないだ自然再生をやっているところとつながりたい！

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6



愛知のいい川づくり

愛知県建設局河川課
川瀬 功記

【活動場所】 愛知県内全域 県管理河川

【実施体制(仲間)】 愛知県、市町村、建設コンサルタント、建設会社、市民団体、住民

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

① 自慢したいこと、強みなど

愛知のいい川づくり

- 河川設計等の手引き（愛知県河川課）に、「愛知のいい川づくり」編としてとりまとめた

◆ 目指すこと

- 自然・景観・利用の3要素のバランス
- 平常時の姿や機能を考える
- 地域に愛され、財産となるような川づくり

◆ 具体的な取組

- 護岸の明度・テクスチャ
- 河床幅の確保
- 護岸天端の処理
- 寄せ土、寄せ石
- コンクリートの表面処理
- 階段工の設置



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4



一級河川伊賀川(愛知県岡崎市)

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

② 知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 治水だけではなく、環境（自然、利用、景観）も含めた河川整備の社会的な合意や価値観の共有はまだまだ足りない。

環境のベクトルをもっと強く・太く

- 組織内及び業界内でどのように取り組みを徹底、広げていか。

慣習・慣性力を振り切る

- レベルアップにつながることにもっと取り組みたい。

チャレンジをもっと気軽に

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



二級河川山王川(愛知県美浜町)

運動公園

広場(これから整備)

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③ 今後コラボしたい“こと”や“人”

- 情報発信の強化
手法、しくみ、空間的な広がり、継続性
- 技術的な裏付け資料の作成
過去の経験から一歩踏み出すためには、わかりやすい考え方や根拠が必要
- インフラの質向上
土木全体として、生み出すもののレベルアップを図る
インフラ・プロダクツとしての質向上を意識する
(生物の豊かな河川整備、風景にマッチした河川整備など)

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

家棟川にビワマスを取り戻せ! ～本設魚道設置までの道のり～

家棟川・童子川・中ノ池川にビワマスを戻すプロジェクト
佐藤 祐一



【活動場所】 滋賀県野洲市・家棟川流域

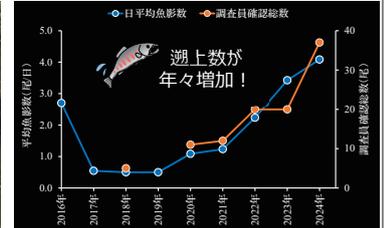
【実施体制（仲間）】 野洲市環境基本計画推進会議「水と緑・安心の野洲」（愛称：えこっち・やす）、野洲市環境課、滋賀県琵琶湖保全再生課、滋賀県南部土木事務所、滋賀県水産課・水産試験場、滋賀県琵琶湖環境科学研究センター、TOTO株式会社滋賀工場、ビワマス調査隊の皆さん

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

1

① 自慢したいこと、強みなど

- 市民発意による仮設魚道の設置と県土木事務所による**本設化**
- 地元有志の調査員による毎日の**遡上調査と密漁監視**
- ビワマスが本設魚道を**多数遡上**
- 母川帰帰性のあるビワマスがプロジェクト開始以降**年々増加**
- ビワマス調査隊の結成とLINEグループを通じた**地域内の情報共有**



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

4



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

2

② 知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 魚道上流にラバー堰があり、洪水調節・消火用水・農業用水のため地元自治会において運用されている。
- 他地域への送水やより上流での利水操作により水が枯れることがあり、遡上したビワマスや産卵した卵、稚魚への影響が懸念。
- 多目的な水利施設の操作について関係者とのように協議する？



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

5



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

3

③ 今後コラボしたい“こと”や“人”

- 市民主体の「ビワマス保全」の輪が県内各地に広まりつつある。これらが連携して、ビワマスの保全や利活用について県民・市民が考える「**ビワマスの日**」を創設したい！
- 「ビワマス保全」は琵琶湖や水辺の環境、そして地域の活性化について考える切り口（きっかけ）の一つ。ビワマスが遡上する時期に**地域の川を眺めて、そのドラマチックな姿に感動できる人・地域**にしたい！



「ビワマスの日」の創設
(11月〇日?)

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

6

滋賀県東近江市における農業排水路のエコアップ IHIによる小さな自然再生の挑戦

株式会社IHI
吉田公亮



【活動場所】 滋賀県東近江市・愛知川流域

【実施体制（仲間）】 株式会社IHI、株式会社IHIインフラシステム、東近江市、NPO法人里山保全活動団体 遊林会、滋賀県立大学環境科学部 瀧研究室、公益財団法人リバーフロント研究所、滋賀県、愛知川沿岸土地改良区、愛知川漁協組合、公益財団法人東近江三方よし基金

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

- 移動距離420km！！
東京・横浜から東近江市まで出張して活動しています
- アユがいます。ピワマスも産卵
愛知川の瀬切れや洪水時の魚の避難場所として機能
- 環境省の自然共生サイトに認定



出典：WEB魚図鑑



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4



出典：IHI HP



滋賀県立大学 環境フィールドワークの講義受講@矢倉川 (2023年6月)

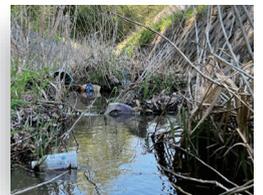
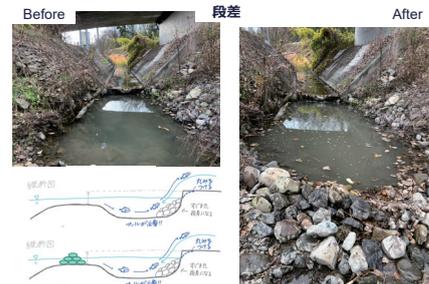
『小さな自然再生』現地研修会 (2023年11月12日)

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 川と水路の接続部の段差をどうしたら良いのか？
- 生き物の種類がわからない
- ゴミが減らない
- 除草剤散布の影響があるかもしれない



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



出典：遊林会 HP

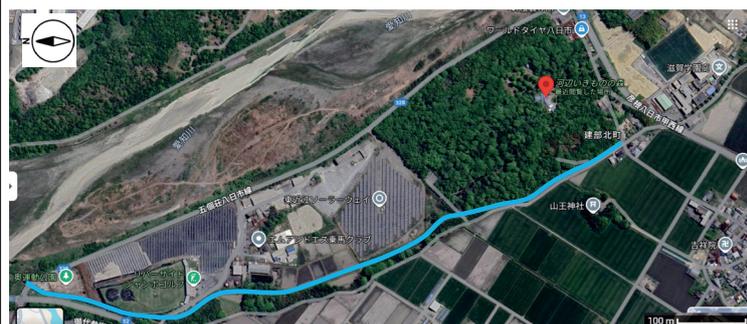
遊林会「みんなで水族館」(2025年8月2日)

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

- 水路の周辺の企業や学校、地元の方々
- 定点観測の仕方を教えてくれる専門家



出典：google map

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

みんなで作る 野洲川のアユの産卵場 小さな自然再生2.0

国土交通省近畿地方整備局 琵琶湖河川事務所
発表：河川環境保全モニター・武田みゆき



【活動場所】

滋賀県守山市・野洲川流域

【実施体制（仲間）】

国土交通省近畿地方整備局 琵琶湖河川事務所、滋賀県守山市、株式会社 伊藤園、株式会社建設技術研究所

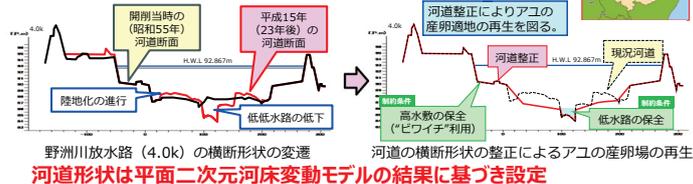
2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

● 国土交通省の野洲川自然再生計画の第3弾として事業中

- ① 落差工魚道の改築（H23事業完了）
- ② 河口部ヨシ帯の再生（R元事業完了）
- ③ 瀬淵の再生（指標：アユの産卵）



課題 予測には不確実性が残る。

- **自慢**：人の手によりアユの産卵場再生の予測の不確実性に対応
- **強み**：河川管理者と市民が一体となり、大きな工事（物理現象の理解）と **小さな取り組み（市民の「思い」）の相乗効果!!**
アユの産卵場の創出と維持管理・改良

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

4



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

1) アユの産卵を確認できていない！

・アユが集まってきているのは確認しているが、卵が確認できていない…
（流下仔魚は確認されているので、近傍では産卵している）



・水温が高すぎて、アユがすぐに産卵しない
（産卵場づくりの実施時期を再検討する必要がある）

2) 多くの市民に感心をもってもらいたい！

・スマートフォン・アプリを使った調査イベントを試行



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

5



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

● 大きな自然再生 + 小さな自然再生；二刀流による相乗効果

小さな自然再生2.0

大きな自然再生と小さな自然再生の相補性		
大きな自然再生	小さな自然再生	
規模・範囲	大規模・広域的	小規模・局所的
主な主体	国・行政	地域住民・NPO等
補完する	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 治水・利水との総合調整が図れる ✓ メリット ✓ 広域的な生態系全体の回復が可能 ✓ 長期的な実施体制構築が可能 	<ul style="list-style-type: none"> ✗ 治水上の制約や許認可等が必要 ✗ 効果が局所的 ✗ 活動は担い手の熱意に依存 ✗ 参加のしやすさと学習効果が高い
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ✗ 継続的な地域の関心の維持が困難 ✗ 高額な費用と長期間を要し、成果が出るまで時間がかかる ✗ 多様な利害関係者の合意形成が難しい 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 低コストで迅速に着手でき、効果を実感しやすい ✓ 住民交流や地域活性化につながる

- 多くの企業や団体とのコラボ
- 企業のCSR活動（R7は伊藤園さんが参加）
- 学校の授業・大学等の研究



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

6

鴨川天然アユの壁問題と 井桁魚道 "#魚道"



京の川の恵みを活かす会 (略: 活かす会)
副代表 中筋祐司



【活動場所】 京都府京都市・淀川流域 (鴨川 他)

【実施体制 (仲間)】

漁場生産力・水産多面的機能強化対策の活動組織

構成員: 研究者、賀茂川漁業協同組合、京淀川漁業協同組合、保津川漁業協同組合、宇治川漁業協同組合、市民団体 他 (行政: 京都府水産課、京都市農林振興室)

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

① 自慢したいこと、強みなど

活かす会がつくる魚道

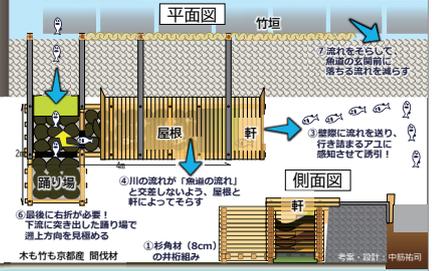
1. みんなで手づくり (着脱) できて、
 2. 増水に耐えて、
 3. アユなどが使ってくれる、
- この3点を思考し、デザイン



2013年から設置している
井桁魚道 (略: #魚道)

7つの特徴…

- ① 素材と構造は? →
- ② 固定の方法は? →
- ③ 横向きなのは? →
- ④ 蓋があるのは? →
- ⑤ 箱の中の工夫? →
- ⑥ 踊り場の役割? →
- ⑦ 竹垣の役割は? →



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表



2025.05.18 鴨川丸太町橋下流の落差工 (高さ11m) における#魚道の設置作業

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

② 知りたいこと、悩みごとや困りごと

1. 2011年に設立した活かす会は、2014から、農林水産省 (水産庁) の漁場生産力・水産多面的機能強化対策交付金を活用し、河川で活動を展開 (2011~12は京都市・府交付金)
2. 活かす会は、会員とサポーターにより構成
3. 代表、副代表、幹事 (5名) がそれぞれ活動リーダーとして、各活動を実施
 - ① #魚道の設置 (3~5月) ※2025は3箇所
 - ② 稚アユ遡上調査 (5~7月)
 - ③ ゴリ・ハエの産卵床造成と産卵床調査 (7~8月)
 - ④ #魚道の撤去 (10~11月)
 - ⑤ 川の恵みを活かすフォーラム 食味会&報告会 (10~11月)
 - ⑥ 仔アユ流下調査 (11~12月)
 - ⑦ 渓畔林整備と水生動物モニタリング調査 (2~3月) 他

→ サポーターによる活動の参加人数は現状維持
→ 活動の充実、エリアの拡大は困難

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表



2025.07.12 鴨川三条大橋下流の落差工に設置した#魚道を上るアユ (撮影: 中筋祐司)

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

③ 今後コラボしたい "こと" や "人"

1. 活かす会は、漁場生産力・水産多面的機能強化対策交付金を活用する活動組織として、河川における小さな自然再生として、一部の壁問題に向き合っている。
2. しかしながら、そんな壁問題は、水路、水田においても、U字溝、水田からの排水塩ビ管など、多数存在
3. 一方で、農林水産省の多面的機能支払交付金を活用する活動組織が、流域の農業地域において、農地維持や資源向上 (①施設の軽微な補修、②農村環境保全活動、③多面的機能の増進を図る活動) の活動を実施
4. ③多面的機能の増進を図る活動として、水路魚道や水田魚道の設置が活動項目の1つ (選択制) になっているが、各活動組織において、選択されていない場合が多い。

→ 流域における小さな自然再生活動の新たな展開
→ 活動組織の連携

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

みんなの川塾

～大手川の環境改善と流域学習～

京都府立宮津天橋高等学校 フィールド探究部

三宅 歩橙 多々納 智



京都府宮津市・大手川流域

実施主体：京都府立宮津天橋高等学校フィールド探究部

協力：上宮津地区、大手川サポーターズクラブ

京都府丹後土木事務所、宮津市教育委員会

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

活動の目的：人と川とを楽しみと学びでつなげる

○大手川と親水公園の環境改善

- ①放置されていた親水公園を川との接点に
- ②バープエやワンドを用いて多様な生物が住める環境作り

○普及活動

- ①「みんなの川塾」の開催
川を全身で体感したり、魚を捕まえる「楽しさ」
水害の怖さ、川と人との関係を知る「学び」
- ②活動を記事にし地域に活動の輪を広げる

強み 高校生が地域の先輩、子ども、専門家とつながりながら川を学び、楽しみながら探究をしている

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

○世代をつなげ、裾野をもっと広げたいが...

- (悩1)川塾が申し込み多数でキャパオーバー
- (悩2)中学生が...
- (悩3)30～40台(子育て世代)が川への親しみが薄い

○地域ごとに河川学習の機会はあるが...

- (悩4)年中行事的な単発イベントの色が強い
- (悩5)環境学習になっても、環境づくりまでは届かない
- (悩6)ノウハウを共有し、実践してもらうまでのハードル

○小さな自然再生が日常になっていない

- (悩7)活動の認知度は高まったが、協働の機会は限定的

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

○他の地域の学校や団体と活動をしてみたい
多様な事例を学んで、「新たな視点」を得たい

○「みんなの川塾」を「みんな」のものに

- 現状：高校生が主体となって企画
- 課題：「みんな」の要素が強く打ち出せていない
 - ①企画者と参加者が明確に分かれていない
 - ②中学生になると参加できない枠組み
 - ③保護者は集合場所までの送迎のみ

方向性：小中高生＋地域のみんなで、川塾を企画・運営
期待：持続可能性と発展性の実現

参加者(子どもも大人も)

学生実行委員 行政・協力者
(小中高生) 流域住民

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

淀川河口域の自然再生活動～石干見～

大阪市漁業協同組合
畑中啓吾



【活動場所】大阪府大阪市 淀川河口域

【実施体制（仲間）】大阪市漁業協同組合、淀川河口域を考える会
京の川の恵みを活かす会、海遊館、なにわECO会議

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

① 自慢したいこと、強みなど

- 石干見：石で半円形を組み、石と石の間に魚の逃げ道を作っておき、潮の干満を利用して魚を捕る



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

② 知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 大阪市漁業協同組合では主にイワシシラス、イカナゴを漁獲する船びき網漁業やウナギ、シジミ漁業を操業
- 大阪湾奥部、淀川河口域に位置し、大阪・関西万博が開催された夢洲が近く、大阪湾、淀川の生産性向上に向けた活動に取り組むとともに、大都市沿岸である大阪湾、淀川産魚介類の販路拡大やイメージ向上に取り組む。
- 当組合における課題
 - ① 自然環境の変化等による魚介類の減少
 - ② 大阪湾、淀川のイメージの悪さ

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

③ 今後コラボしたい“こと”や“人”

- 淀川河口域の生産性向上の取組
 - ① 淀川河口域を考える会
 - ② しじみ調査、種苗放流（水産多面的機能発揮対策事業）
 - ③ 石干見、ハゼ釣りイベント
- 大阪湾・淀川産魚介類の6次産業化・販路拡大の取組
 - ① 販路拡大の取組
 - ② 6次産業化商品の開発
 - ③ 淀川流域での連携・京の川の恵みを活かす会との連携
- 大阪湾、淀川に関心、環境に関心のある流域、又は流域外の方の参加をお待ちしております。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

福田川水系の 生物多様性確保のための 自然環境調査について



福田川クリーンクラブ
会長 村上健一郎



【活動場所】

兵庫県神戸市・2級河川福田川流域

【実施体制（仲間）】

NPO法人生物多様性を守る会、神戸市立工業高等専門学校、神戸市環境局
落合池里山里池ネットワーク、名谷町奥畑協議会

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

①自慢したいこと、強みなど

●【継続的かつ多面的な環境調査】

全長約8キロの二級都市河川福田川の厳しくも豊かな生態系を守るために、2014年度から福田川の源流から河口までの7か所を年4回季節ごとに、二日間掛けて巡り

①水生生物 ②水質 ③植生 について調査記録、報告・公開

●【環境改善への取り組みのきっかけ作り】

福田川水系の生態系、特徴的な水質（源流・上流ほど水質が悪い）への市民・行政の理解が深まり、源流のため池では地元住民による環境改善の取り組みが始まった

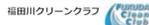
●【調査に必要な専門知識あり】

当クラブには、水処理土木の専門家、森林管理の専門家があり、水生生物の捕獲・飼育（同定）に詳しい協力団体がある

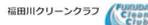
2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表



2024年1月27・28日
福田川生物多様性確保プロジェクト調査結果
(生き物、植生、水質)



2024年6月1・2日
福田川生物多様性確保プロジェクト調査結果
(生き物、植生、水質)



2024年9月7・8日
福田川生物多様性確保プロジェクト調査結果
(生き物、植生、水質)



2024年11月30・12月1日
福田川生物多様性確保プロジェクト調査結果
(生き物、植生、水質)



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

【直面している課題や壁】

- 調査メンバーの固定化、高齢化
- 近年の天候不順に対応した柔軟な調査日程の変更
- 任意団体の限界

【解決したい困りごと】

- 調査の専門機材の拡充・検査費用の捻出
高精度のDo測定器、高度な土壌分析
- 会議・打ち合わせができ、ネット環境を備えた常設スペース確保
- 「生物多様性確保」のための市民の啓発（外来生物対策）

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

③今後コラボしたい“こと”や“人”

【コラボレーションしたいこと】

- 「治水一辺倒の川」 → 「生き物と景観に配慮した川」
河川工学の専門家の知見を加えた具体的な改良デザインと、流域住民・自治体への実現働きかけ
目指すは、横浜市栄区の「いたち川」
- 福田川水系の豊富な水生生物の飼育・常設展示・保護啓発活動
目指すは、「西宮市 環境学習サポートセンター ミニミニ水族館」

【コラボレーションしたい人】

- 全国の先進の河川の環境保全・川づくりの現場の視察・推進者との交流
- FCCの活動を理解し、支援くださる企業・団体

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表



【活動場所】 兵庫県千種川流域（宍粟市・佐用町・上郡町・相生市・赤穂市）

【実施体制（仲間）】 兵庫県西播磨県民局光都土木事務所・個人会員・（千種川漁業協同組合・佐用川のオオサンショウウオを守る会・流域ライオンズクラブ・赤穂さとうみカヤックス）などが緩やかに連携



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

- 「千種川圏域清流づくり委員会」（成立背景には昭和48年から流域ライオンズクラブが「流域で連携して」水生生物調査を実施してきたことが大きい。）
2002年から住民と地域活動団体、県土木事務所がゆるやかに連携しながら、川づくり活動を実施してきた。専門家の先生方からのアドバイスをダイレクトにいただけることが実施するうえで非常に重要。
- 県が流域全市町から、川に思いの深い人材・団体をつないで意見を積み、流域圏をターゲットにした具体的活動を展開してきた。
- 活動例：春は下流の汽水域で稚アユやモクスガゴの遡上観察、夏は中流でチ子コ（カワヨシノボリ）釣り大会、秋は中流の河川ビオトープ（小さな自然再生実施後の経過観察。初期は秋に源流のブナ林散策（熊遭遇の危険性が高いため中止））8月初旬に全流域での一斉水温調査⇒（高水温域の分布拡大）
- 「水辺の小さな自然再生」の取り組みを、兵庫県が「具体的な事業施策として実施。」



（千種川自然再生計画）

（千種川水系における小さな自然再生 事業の実践と今後の展開について）

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4



- 千種川水系安室川・淡水産紅藻類チヌジリ(の保護活動の一環)
- 「川を癒す、癒く」の体験イベント
- 地元山野里小学校区の地区公民館主催の「なんでも体験プログラム」の一つとして実施
- 上郡中学校科学部がチヌジリ生態研究
- 上郡高等学校地域環境科がチヌジリ胞子の着床実験やわんど「タナゴパラダイス」は河川の連続性のための水路を形成・維持活動

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと 重い・・・



- 人と人をつなぐことに困難さが増した。
行政の担当は数年で異動があるが、住民側も新しいメンバーも加わって活動しているが、イベント・調査実施への関わりに限定的なものが多く、当初の委員会の設立目的である川づくり全体を考る組織としての形がとれない。
- 地域の高齢化がすすみ活動団体が維持できなくなっている。
これまで半世紀以上、千種川全流域での水生生物調査を実施してきたライオンズクラブが、5クラブのうち3クラブが解散したり活動停止になったり、千種川全体を網羅して活動する団体や人のつながりが途絶えてしまった。
- 「働き方改革、部活動の地域移行」の影響
水温調査や水生生物調査の実施に際して、小中学校の児童生徒、教師の林間学習によるグループでの参加実施が出来なくなった。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



- 赤穂市加屋川(河川勾配1/1000)での小さな自然再生活動(2024-2025)
- 「加屋川ふるさとの川整備連絡協議会」と赤穂市、県光都土木事務所河川砂防第1課が連携し、隣接する赤穂小学校児童から希望者を募集して実施
- 昨年のパープ工設置による流れの変化により、オオカナダモが生えないエリアができており、バラタナゴ、インガイ、スジシマドジョウ、カワムツ、オイカワ等の魚類が目視確認できた。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人” いろいろ！



- 流域委員会活動を継続する、継承していくための人材がない。
入れ替わる行政担当者と関係をつないでいく人材も必要。
- 流域住民やイベント参加者が、日常的に川の恩恵、小さな自然再生による成果を実感してもらえる取り組み事例があれば参考にしたい。
- 流域ライオンズクラブが52年間実施してきた「千種川水生生物調査」はデータ、委員会が23年間実施してきた「千種川水温調査」データ、これらを何らかの形で活用してもらうことはできないか。もったいない。
- 兼業農家・川漁師として、千種川の恵みを「食」の観点で知ってもらえるよう、個人販売を行っているが、流通方法や販路の拡大についての事例やアイデアを知りたい。(小規模な個人・少人数の漁では、鮎・モクスガゴ・スッポン等は、毎日安定して捕獲できず、水温や水質条件により、漁が一度に集中した漁獲になる。)
例：「ChikusagawaPride」というブランド名で、SNSで千種川中流産の鮎、カゴの食文化や味を発信している。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

丹波篠山市における「ふるさとの川づくり」への取り組み

ふるさとの川づくりワーキングチーム（丹波篠山市）
井関 良太



【活動場所】

兵庫県丹波篠山市内 15箇所 加古川、由良川、武庫川流域

【実施体制（仲間）】

丹波篠山市農都環境政策官、まちづくり部地域整備課、環境みらい部農村環境課、市内小学校・幼稚園、市内高校、環境創造事業者、兵庫県自然保護協会

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

① 自慢したいこと、強みなど

--- 生きものと子どもたちの笑顔あえる ---
ふるさとの川づくり

丹波篠山市は、瀬戸内海に流れる加古川・武庫川、日本海に流れる由良川の3水系の源流域に位置。多種多様な生きものが生息し、子どもたちが生きものの魅力に触れることができる「ふるさとの川再生事業」を実施。



丹波篠山市では、多種多様な生きものが暮らす河川環境を保全・再生し、その魅力を次の世代に引き継いでいくため、平成25年に『ささやまの川・水路づくり指針』を策定（令和5年11月改訂）。「ふるさとの川再生事業」は、この指針に沿った取り組みとして、地域や学校、環境創造事業者らと連携して、身近な川を生きものと子どもたちの笑顔あふれる豊かな川に再生させる取り組みです。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

代表的な取り組み



篠淵川 魚道整備
(丹波篠山市川阪)

丹波篠山市初となる魚道整備への取り組み事例。令和2年度にて、生きものの遡上効果を図るため、落差部に対する解消として魚道を設置。工事受注者と市職員による植石の配置検討・作業を実施。



畑川 魚道整備
(丹波篠山市畑宮)

地元まちづくり協議会や小学校・高校との連携による生きもの調査を踏まえ、令和3年度にて魚道を整備。取り組み効果として、「未来の畑川」と題して、小学校の学習発表会への演出へとつながる。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

② 知りたいこと、悩みごとや困りごと

【みなさま教えてください】

- 取り組み後の取扱いについて
 - ① 効果検証について（定期的な検証が必要）
 - ② ハード整備後の将来の維持管理など（機能回復の補修方法）
 - ③ P Rの方法
- 関係機関との調整・協議
 - ① 河川管理者
 - ② 行政 ⇄ 地域住民 ⇄ 学校 ⇄ 関係機関のあり方・位置付け
- 将来へ
 - ① 源流域のまちにふさわしい川づくりとは
 - ② 豊かな自然環境の保全・再生を未来に引き継いでいくためには

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

代表的な取り組み



高坂川合流水路 環境配慮対策
(丹波篠山市高坂)

地元自治会主体による水路づくりとの接続工事を実施。自然環境に配慮した石積水路などを整備。地元自治会との連携による農村地域の環境保全への取り組み。令和5年12月完成。



波賀野川 親水護岸整備
(丹波篠山市見内)

生態系遡上効果への魚道整備に合せ、浅瀬形成による近隣児童・幼稚園児への要望対応として、親水スペース整備。生物的要素と親水の要素の両面への取り組み。令和7年5月完成。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

③ 今後コラボしたい“こと”や“人”

- 今後、みなさま方の取り組みについて、先進地としての視察などを考えています。受け入れは可能でしょうか。

- ① 市民参画による活動などを通じた川づくり
- ② ヒトが集い水辺に親しみを深める川づくり
- ③ 子どもたちを対象とした川イベント
- ④ 都市部の川づくり、農村部の川づくり
- ⑤ 水の日・水の週間への取り組み
- ⑥ 近年の気候変動に対する取り組み



啓発冊子を配布しています。是非ともご覧ください。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

小さな村で始まった 水域をつなぐ小さな自然再生

株式会社エーゼログループ
太刀川晴之



【活動場所】 岡山県・西粟倉村・吉野川源流域（吉井川水系）

【実施体制（仲間）】 株式会社エーゼログループ、西粟倉村、香川高等専門学校高橋研究室、中央大学海部研究室、一般社団法人Nest、一般財団法人西粟倉むらまると研究所、一般財団法人ネイチャープレナー・ジャパン、学校法人国際総合学園 国際自然環境アウトドア専門学校（ほか）

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

① 自慢したいこと、強みなど

「ピオ田んぼプロジェクト」

目的：生物多様性保全と中山間地域における持続可能な農業の両立

内容：田んぼの一部にピオープを造成し、環境保全型農業を実践しながら、田んぼの価値の最大化にチャレンジ。ピオープづくりや水路の環境再生を地域外の関係人口や地域の小学生とともに、小さな自然再生で実施。田んぼだけではなく、用排水路の環境再生や河川からの連続性回復に向けたポータブル魚道の設置など、多面的な活動を展開中。

効果：メダカやドジョウ、水生昆虫が大幅に増加。絶滅危惧種の繁殖・増加。CSAをモデルとした「ピオ田んぼクラブ」で田んぼや生きものを中心とした新たな関係人口を創出。新たな付加価値によるブランド化や6次化



「オオサンショウウオをシンボルとした川の再生」

目的：川に魚がたくさん溢れ、そこで川遊びをする子供達の風景を取り戻す

内容：吉井川源流域の知社川環境改善とオオサンショウウオ保全。堰へのポータブル魚道設置と効果検証、人工繁殖巣穴の設置、パープ工づくりなどのイベント実施

効果：オオサンショウウオの遡上の確認



豊かな自然が残る源流域において、河川・水路・水田を一体として捉え、地域内外の行政・民間・研究、教育機関が連携しながら、互いの強みを生かして活動を推進！
⇒豊かな暮らし(well-being)と豊かな自然環境が一直線につながる「未来の里山」の実現へ

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

② 知りたいこと、悩みごとや困りごと

<取り組みの拡大に向けて>

- 地域住民の参画機会のさらなる増加にむけて
○「ピオ田んぼクラブ」の活動で移住者・子供・親子の巻き込みはできつつある。
△地域の農家をどのように巻き込んでいくか
- 行政や教育機関との連携強化
地域への取組拡大（取組農家への補助等）に向けての行政との連携強化
希少種保全の仕組み強化や、「みんなで守っていく」ための工夫。

<農地や水路の維持管理>

- 管理コストの軽減にむけてのさらなる工夫
- 収益化（農家の所得向上）とうまれた価値の地域還元



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



31°C 87°F 2025/08/21 20:01

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③ 今後コラボしたい“こと”や“人”

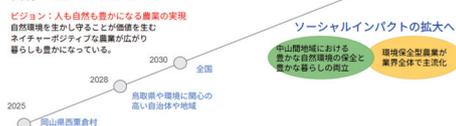
- 「ピオ田んぼ」や「ポータブル魚道」に取り組みたい地域や人、企業
- 類似の取組をされている地域の方々
今取り組んでいるモデルを全国に広げていけることが最終目標です。
情報交換や連携をさせていただけたら幸いです。
- 岡山県吉井川流域や鳥取県の地域や企業、金融機関等
特に自分たちが活動を行っている吉井川流域全体で取組を拡大させていけたら嬉しいです！
ぜひ、一緒に活動していきましょう。

まずはぜひ「ピオ田んぼクラブ」にご入会いただけたら嬉しいです！
現在、来年度の企画構想中。最新情報は、Instagramにて！⇒

川の再生はふるさと納税型クラウドファンディング実施中！
応援お願いします！↓



目標・ロードマップ



BIO_TANBO

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6



① 自慢したいこと、強みなど

- 老若男女が集うふるさと
- とってもとっても小さな自然再生、だけど日常
- 町内のこども園や小学校で水辺教室開催
- 小さな自然再生マインドを持った川ガキ
- エビも増えました



② 知りたいこと、悩みごとや困りごと

- いつも遊んでいる川の浚渫工事を回覧板で知る
→もっと早く知りたい、一緒に考えたい
- 自然観察会はできるようになった→自然再生にもっと注力したい



③ 今後コラボしたい“こと”や“人”

- 身近な自然への愛着を抱く川ガキを増やし続けたい
- 日笠川流域の自然のこと、生きものごと、自然再生の手法、私たちにできること、もっともっと知りたい
- 工事を回覧板で知るのでなく、事前に河川管理者と話せるようになりたい
- 日笠川流域オリジナルの流域治水・自然再生をみんなで考えたい

川遊びから、川づくりへ！

～小さな自然再生で、みんなでやる川づくり文化をつくる～

NPO法人 川塾
塩崎健太



【活動場所】 徳島県徳島市及び神山町 吉野川下流域と支川 鮎喰川
【実施体制（仲間）】 NPO法人川塾、株式会社パドルブリュー、阿波魚類研究所
WEEK神山

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

- ・参加者のべ3,000人/年。川と愉快地暮らす文化を創る。
- ・0歳～大人まで幅広い年代に、楽しみながら
小さな自然再生を体験できる場を提供している。
- ・みんなで豊かな川をつくり、暮らす文化を根付かせる。



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4



思いっきり、川で遊んでいます！！

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 河川環境に対する、データ・目標・計画がない。
- 活動を継続させるための資金をどう集めるのか？
(企業との協働など)
- 地域の方の巻き込む方法を知りたい。
- 河川管理者との連携の仕方を知りたい。
定期的に情報交換の場を設けるには、どうしたらいいか？

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



赤ちゃんもお母さんも、石を積んで遊ぶ

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

- 魚類の生息場調査を実施する。
- 「生物の生息・生育・繁殖の場」を河川環境の定量的な目標として設定をする。
- 目標を達成するために、計画を策定し活動を進める。
- 目標設定、計画づくり等の相談に乗って下さる専門家の方と一緒に活動したい！
- 一緒に川・地域づくりを楽しめる企業等と協働したい！
- 川の価値・楽しみが広く伝わる様に、伝えるプロとコラボしたい！

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

神山の先達とともに、鮎喰川にもう一度、鮎を！

神山つなぐ公社
田中泰子



【活動場所】 徳島県名西郡神山町 ・ 鮎喰川流域

【実施体制（仲間）】 神山つなぐ公社、神山町（まちを将来世代につなぐプロジェクト）、神山に暮らす先達の皆さん、活動NPO法人川塾、あゆリーダー（＝神山町内の高校生・高専生・大学生のボランティアリーダー）、神山町内の小学校（神領小学校、広野小学校）、神山町内の保育所（下分保育所、広野保育所）、アドバイザー&活動サポート：滋賀県立大学 瀧健太郎教授・瀧研究室の皆さん

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

① 自慢したいこと、強みなど

〈まちを将来世代につなぐプロジェクト〉

地域の先達に学ぶ、防災教育を兼ねた「子どもの自然体験」

地域の先達とともに・・・

「遊び」→「自然への感性と知性を育む」→「命を守る力を育む」

世代を超えて育まれる温かい関係性＝地域コミュニティの再構築

鮎喰川流域に暮らす「ひとりひとりの自然観を取り戻す」「流域の文化を再びみんなのものに」

鮎の遡上復活を目指し、地域全体の喜びとして共有したい

地域

学校

保育所

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

② 知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 先達の知恵をどのように体系化・記録化するか
- 運営体制の継続性と担い手育成
- 「生物多様性」の観点を地域住民と理解していくプロセス
- 町の中で別々に行われている 山・里・川の学校での取り組みを 流域プログラムとして育てるには？

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

③ 今後コラボしたい“こと”や“人”

- 地域の自然観（先達の知恵）の可視化
- 中山間地の川をフィールドにした研究や実践の連携
- 河川生態・魚道再生の専門家からの学びの場づくり

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

サケ・マス類の自然産卵促進 に向けた可搬魚道開発の挑戦

国立高専機構 香川高等専門学校 高橋研究室
高橋直己



高橋研究室のホームページ

【活動場所】 北海道斜里郡斜里町シマトツカリ川流域・海別川流域

【実施体制(仲間)】 国立高専機構 香川高等専門学校 高橋研究室, 斜里町役場, 斜里第一漁業協同組合, ウトロ漁業協同組合

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

- 高専の教育・研究と地域の取り組みが一体となって課題を解決
- 地域の力で魚道を運用し、良好な流況を創出

魚道上流端 魚道下流端

U1-U3: 可搬魚道ユニット ← 移動経路

YouTube: サケ・マス類が利用可能なポータブル魚道
URL: <https://youtu.be/AH6qMusTT08>

2.5D模型 (图中的値は原型換算値)
(cm) ①: 傾斜 (60°) ②: 休憩用プール
● 人力で運搬・設置可能
● 複数ユニットを連結し、約1mの落差に対応可能
● 破損ユニットを取り替え、速やかに機能を回復可能

設置・撤去時間約30分
魚道上流での産卵確認

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4

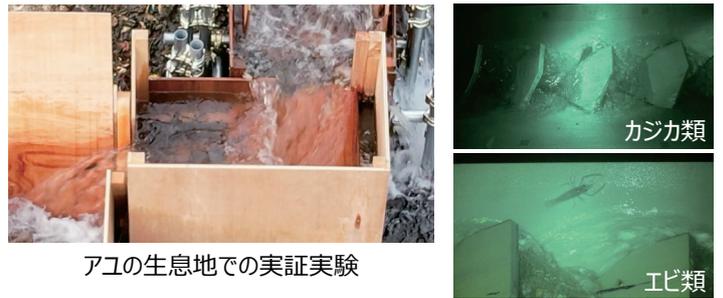


2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 技術の応用可能性を検証するため、様々な現場や種を対象に研究中。



他の可搬魚道¹⁾を利用する小型水生動物

他の可搬魚道¹⁾と同様に、小型・中型の水生動物が利用できるか？

1) 高橋直己, 木下美入, 豊藤 絵, 柳川竜一, 多川 正. 実河川におけるU形断面可搬魚道を用いた水生動物の選上と魚道内流速特性. 土木学会論文集B1(水工学), Vol.75, No.2, pp.1-565-1-570, 2019.

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

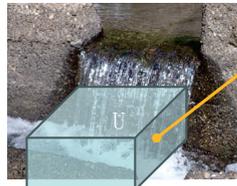
3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

- 「可搬魚道システムの簡易性と機動性を活かして、既設魚道の修復技術を開発できないか？」
(一緒に研究開発に取り組んで頂ける仲間を募集中！)



【破損や河床低下で機能していない既設魚道】
浅く、流速が大きく、壁面から剥離した流れが発生しており、水生動物が進入・移動困難な状態



可搬魚道ユニットを結合して適切な水深・流速分布を形成し壁面からの流れの剥離を抑制

U: 可搬魚道ユニット

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

幼稚園と保護者と技術者が合作する
園児専用里山体験フィールド
「若草幼稚園 すくすくの森」 since1989

学校法人 若草幼稚園



発表：NNラントシャフト研究室 西山 穂

【活動場所】 高知県 高知市・2級河川 鏡川流域

【実施体制（仲間）】

学校法人 若草幼稚園、若草幼稚園PTA、とうちゃんず、すくすくマニア（仮）、
NNラントシャフト研究室、（株）西日本科学技術研究所、（株）相愛

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

①自慢したいこと、強みなど

(1) 保護者・技術者との協働体制



多分野のプロ人材による多様な協力を享受できる（PTA・お父さんサークル・森整備参加など）

(2) 整備と活用によって広がった保育の可能性

同時多発的な遊びを受け入れる空間デザインの発見

見立て・ごっこ
採集
果実
花
動物
水
眺め
音
光

身体運動
拠点となる小広場

複数要素を見だして活かす

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

(1) 自然環境を活かした“あそび保育”の社会認知



(2) 保育士のスキルアップ

- ・自然体験の幅
- ・企画運営の技術
- ・安全管理の判断

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

③今後コラボしたい“こと”や“人”

(1) 学童期(=小学生)へのアプローチ

- ・卒園後に教育を連続させ、地域へ広げる
- ・森資源と保育士人材を有効活用する



(2) 園外の保育者養成：自然体験保育の研修など

- ・地域の自然資源を活かし、地域の保育・教育水準を向上させる

(3) 生物研究者等とのコラボ

- ・この森の個性をもっと理解する
- ・個性・価値を伸ばす方策を議論する



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

とうのはるがわ 唐原川プロジェクト

～大学のそばを流れる川の小さな自然再生～

KSUプロジェクト型教育
「小さな自然再生」で地域の暮らしを豊かにするプロジェクト

小さな自然再生 やろうせ!!

公益財団法人リバーフロント研究所
和田章 主任研究員による
そんなに堅苦しくない講義

7月1日(4限)1209教室



九州産業大学
KIU KYUSHU SANGYO UNIVERSITY

網中 あお
森田 柊

【活動場所】福岡県福岡市 唐原川(二級河川)

【実施体制】九州産業大学の学生たち、唐原川を考える会



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

唐原川プロジェクトの効果

😊 良かった点

- ・活動後は水が綺麗になって、生き物も増えた(気がする)
- ・出水後のワンドを実際にウナギやコイが利用していた。
- ・セイバンモロコシ等の外来種を刈り取ったことで、景観が良くなった。
- ・近くの保育園の子供たちが興味を持って川を観察するようになった。

☔ 改善すべき点

- ・メダカの利用を想定してワンドやたまりを作ったが、秋の調査ではメダカはいなくなっていた。
- ・深みがあって危ないところもある



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

活動のきっかけ

九州産業大学のそばを流れる唐原川



荒れた状態の唐原川
草ぼうぼう、ゴミもたくさん、地域の気持ちも荒れている



愛護活動をしている地域の方
高齢化で年数回の川沿いのゴミ拾いが無いっばい



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

① 悩みごとや困りごと

- 改修前にはいたはずのメダカがいなくなった・・・
- アメリカザリガニやウシガエルなどの外来種も多い。
☞ 生態系への影響だけでなく、ウシガエルの鳴き声は近隣への騒音被害にも繋がる。
- 調査中に入口の鍵を閉められたことがある。
☞ 地域の方との情報共有や協力が不十分？
- 大学の講義で関われるのは1年次のみ、継続的に改善していくには？




2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

唐原川プロジェクトとは



・「グリーンインフラ論」の講義を通して「小さな自然再生」を知り、唐原川で実践自分たちで川を改善し生物(特に在来種)の生息に適した多様な環境を作りたい!

- ・草刈りによる外来植生の駆除
- ・ワンドやたまりの造成
- ・掘り出した石を活用した石倉づくり





和田さんにも来てもらいました!!

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

② 知りたいこと・学びたいこと

- ワンドを作るなどしたが、大雨の後にメダカがいなくなりました。
☞ 構造の問題? 季節的な問題?
- 冬場の調査では魚類の数が全体的に減っていた。今後回復するのか! ?
☞ 今後も定期的な調査を続けたい

③ 今後コラボしたい“こと”や“人”

- 授業で唐原川の保全に関われる機会は1年次のみであり、継続的に関わってほしいように仲間・集まりを作りたい。
☞ 学科・学部を超えた緩いサークルのようなものを!
- 活動を続けていくにあたって、地域の方との連携を強めていきたい。
☞ 活動場所のすぐそばには保育園もある
- 以前、唐原川で行われていた花見をするのもいいよね★

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

山田緑地で行う水辺環境の保全・再生 魅惑の湿地帯ビオトープづくり 特定外来生物の駆除

北九州市立山田緑地管理事務所
上野 由里代



【活動場所】 福岡県北九州市・紫川流域（山田緑地）

【実施体制（仲間）】 山田緑地管理事務所、山田緑地ボランティアの皆様、NPO法人北九州・魚部、北九州市立いのちのたび博物館（館長、学芸員の皆様）、北九州市ほたる館、中島淳先生、NPO法人グリーンワーク、株式会社九州造園、竹林製作所、北九州市

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

毎年たくさんの両生類が産卵に。多様な水生生物が集う環境になっている

▼希少種の発見もありました!!

①ハガマルヒメドロムシ

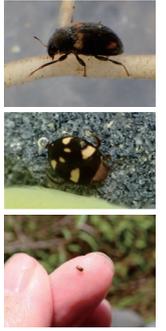
タイブ産地「小倉」で2022年に63年ぶりの再発見

②キボシケシゲンゴロウ

北九州市初記録、県内で2ヵ所目の生息地の発見

③チビマルケシゲンゴロウ（本種の分布北限域）

県内では現在、山田緑地の「ガマの池」のみで生息



「場」を保全再生すれば生き物は増える。「小さな生き物」も棲める環境が大切。

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

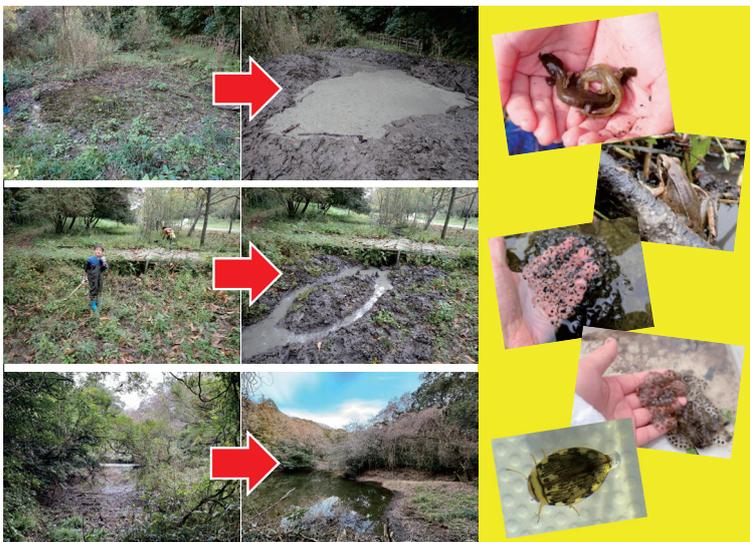
②知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 特定外来生物「アライグマ」の増加 = 産卵に来た両生類も襲う。
- 園内だけで捕獲し続けても他所から侵入。
（まずは）県内全域で、積極的に駆除に取り組む必要がある。
- **少人数で運営**：生き物調査・保全・再生、園内清掃（維持管理）
イベント企画運営、ガイド・出前講座（環境教育）、チラシ・展示制作等
= 人件費削減に伴う現場スタッフのさらなる減少 = 人手不足



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

- **山田緑地の生きもの図鑑をつくりたい!**
= 地元の人にも知らない身近な自然や生き物のことなど
- **湿地帯ビオトープをつくりたい人を増やしたい!**
= 生物多様性の保全（人のためにもなる）自然観察も楽しい
- **現地視察、コラボイベントなど大歓迎!**
= 活動の「場」や普及啓発の機会をより増やしたいと思っています



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

温泉観光地の親玉、大分県別府から
生き物と自然の魅力を発信
～亀川プロジェクト「人と温泉と生き物と」

NPO法人北九州・魚部（ぎよぶ）
井上大輔



【活動場所】大分県別府市 亀川温泉

【実施体制（仲間）】NPO法人北九州・魚部、中島淳博士、福田宏博士、大分県自然保護推進室、亀川の自然環境を守る会、アコーディオン演奏家・木下隆也氏、亀川中央町2区自治会、亀川中央町の一部住民、APUサークル“WANTTO”など

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

1

①自慢したいこと、強みなど

- ①思い：小さな自然再生から、すこし大きな自然再生へ
- ②この取組の「小さな自然再生」とは・・・？
＝その地の自然を再発見し、人と自然のつながりを掘り起こすこと。
※歴史や風土、人々の生き様なども同時にからめながら・・・
人々に身近な自然の存在を再認識（≒再生）すること。
- ③それをもとに、そこで得た自然や生き物のありようを自ら価値づけ。身近な自然の面白さに気づいて「地域自慢」へ。つまり地域性（や生物多様性）の面白さとしての価値を生み出していく。
- ④さらに町（亀川温泉や別府）、あるいは温泉という自然資源の新たな魅力として意味づけをしていく。それを日本の代表的温泉地、京都別府から、内外に、様々な手段で、次々に、仕掛けていく。
- ⑤継続的調査 & 人のFW→成果を踏まえ価値創造の多様な取組

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

4



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

2

②知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 課題や壁は悩みや壁ではなく、次への大切なモチベ。
ワクワクが根幹の活動なので、それがないと続かないのかも・・・



【謎】別府だけ
夏に消える？！

亀川最後の蓮田
ご年配二人だけ！

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

5



2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

3

③今後コラボしたい“こと”や“人”

- 全く無縁の土地で始まった、「生き物好き」が「生き物視点」での取組、どこで、どう広がっていくのか？を楽しんで続けていきたい。



たとえば。
別府の川は、ある意味「終わっている」
どこも三面コンクリート。
まさに名前を失った川。
そして住人も特に違和感を持ってなさそう。
この取組を続けることが
こうした意識の変容、
川や湿地、生き物への
視線の変容につながると
また面白くなるかも。

2025年12月7日『小さな自然再生サミット2025京都大会』事例発表

6

治水・利水・環境の三方よし！ 由布院温泉の宮川再生プロジェクト

ゆふいん豊水会（豊かな水環境創出ゆふいん会議）
事務局長 富山雄太



YouTube

ホームページ



【活動場所】 大分県由布市湯布院町（由布院温泉）・大分川流域

【実施体制（仲間）】 人材育成ゆふいん財団、大分川漁業協同組合、大分川漁業協同組合みなもと支部、由布院温泉観光協会、由布院温泉旅館組合、由布市商工会湯布院支所、由布市商工会湯布院支部青年部、ゆふいん水田営農サポート研究会、湯布院地域自治委員会、温湯区長、温湯区財産管理委員会、湯布院町青少年ボランティアサポートセンター、湯布院経済同友会、NPO法人 ユクリエ 大分県大分土木事務所など、由布市環境課など、九州大学、

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

1

① 自慢したいこと、強みなど

- 以前の概要
水草の堰上げ効果によって河川水位が約40cm上昇、農業用水路の排水不良、絶滅危惧2類ササバモも危機。
- 実施効果
部分的な根絶に成功、平常水位は36cm低下、農業用水路もスムーズに、ササバモも増加
- 多様な関係者で持続的な活動
みんな忙しい！特に観光関係者。多くの関係団体が少しずつ人手を出す。地域貢献したい銀行さんには超感謝。
- 技術開発
対象種の形態や河床の状況に合わせて効果的な手法検討。
例）消防ホースの放水で吹き飛ばして、下流でキャッチ重機で河川外へ



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

4



川を堰き止める外来種の水草 全部抜く

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

2

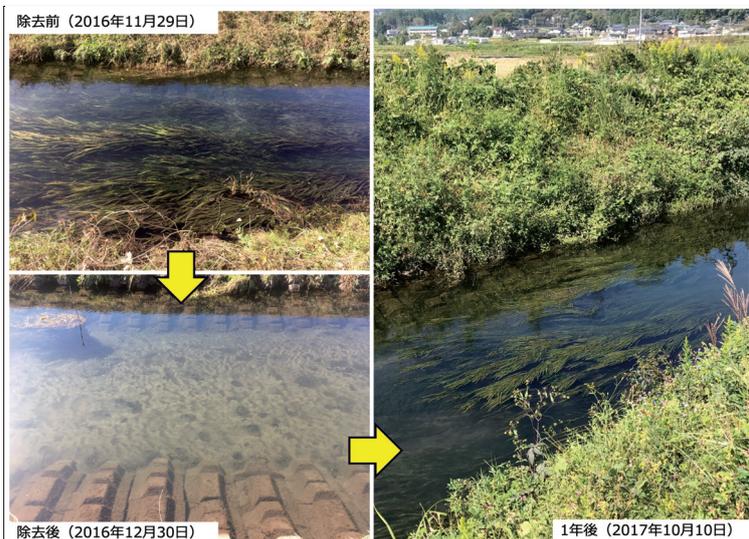
② 知りたいこと、悩みごとや困りごと

- 困りごと
上流から始めて範囲が合計約800m。すでに「小さな」自然再生ではない。フォローやモニタリングが追いつかない。どこで折り合いをつける？
- 知りたいこと
【最新研究】日本国内でオオセキショウモとされてきた種の多くがオーストラリアセキショウモだと判明。宮川は湧水河川で冬も温かく熱帯性外来種も生息できる可能性。対象種の正体がわからなくなりました。



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

5



除去前（2016年11月29日）

除去後（2016年12月30日）

1年後（2017年10月10日）

2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

3

③ 今後コラボしたい“こと”や“人”

外来種駆除により、砂礫の河床や在来水草が復活した宮川ようやく下地が整ったので次はハビタットの再生をやりたい。

- ナマズ
盆地の氾濫原河川・宮川は護岸の石組みの中にナマズが多い。隠れ家が現在護岸だけ。そこで石組み等でナマズの住処づくり
- オオシマドジョウ
由布院盆地で採れなくなってきたオオシマドジョウ。安定的に砂河床を維持できる施工をやりたい。
- ゲンジボタル
30年前はホタルが乱舞していたらしい。今は1尾程度。
①砂礫河床の復活←**今ここ**
②カワニナ復活
③幼虫定着
④サナギのハビタット再生
⑤ホタル復活



2025年12月7日 『小さな自然再生サミット2025京都大会』 事例発表

6

4. 事例発表者ポスター交流会

各発表者が4分間では発表しきれなかった熱い思いや取組みの詳細を参加者にご紹介頂くため、昼休みには各発表者とポスターや展示物を囲んでの交流時間を設けました。なお、本交流会及び閉会後の茶話会では、株式会社伊藤園よりお茶をご協賛いただきました。





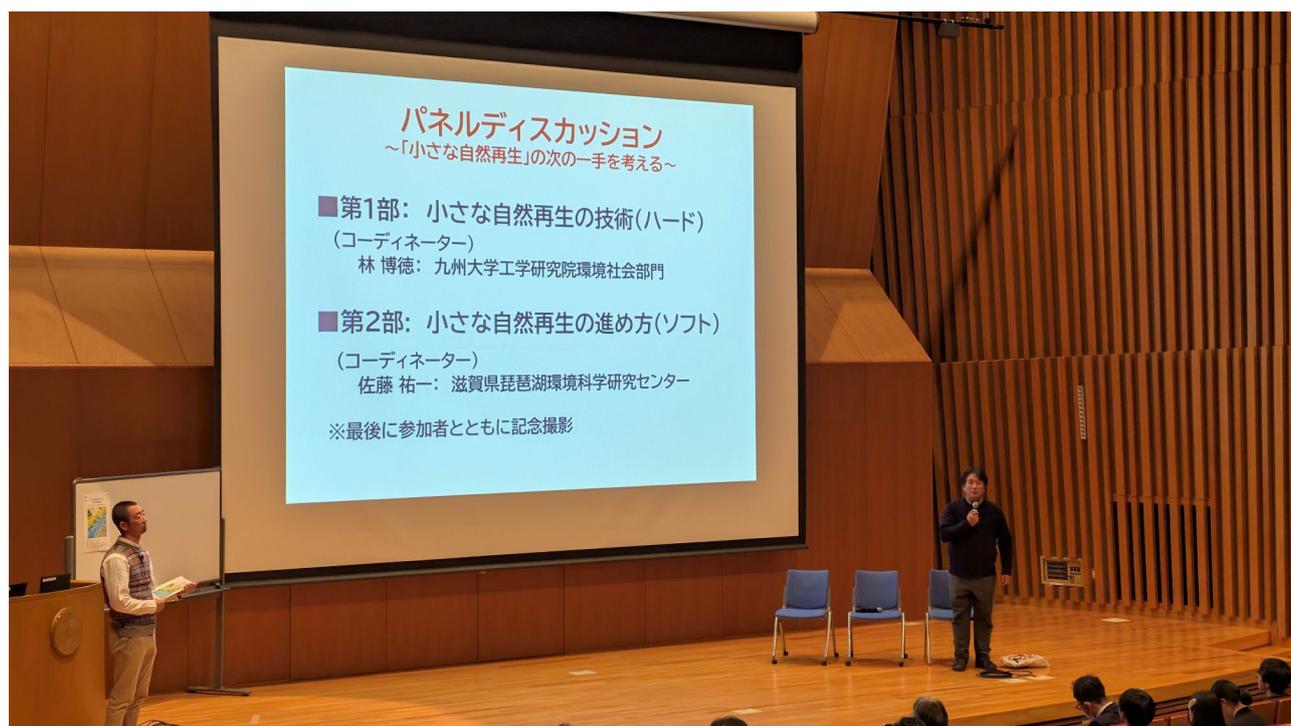


5. パネルディスカッション

午後からは、「**小さな自然再生の次の一手を考える**」をテーマに、2部構成で参加者とともに議論を深めました。

前半は、**小さな自然再生の技術（ハード）**をテーマに、実行委員会より林博徳先生（九州大学工学研究院環境社会部門）にコーディネーターをお務め頂きました。また後半は、**小さな自然再生の進め方（ソフト）**をテーマに、実行委員会より佐藤祐一さん（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）にコーディネーターをお務め頂きました。

同じく実行委員会より三橋弘宗さん（兵庫県立人と自然の博物館）に前半・後半のパネリストをお務め頂くとともに、両コーディネーターが指名した午前の事例発表者にもパネリストとして登壇頂きました。議論の要旨を以下でご紹介させていただきます。



【第1部：小さな自然再生の技術（ハード）】

（コーディネーター）林 博徳：九州大学工学研究院環境社会部門

＜前半＞ 二名の高校生の発表者（札幌工業高等学校土木科・中居さん、宮津天橋高等学校・三宅さん）及び兵庫県立人と自然の博物館・三橋先生をパネリストに迎えて、まずは川でできる小さな自然再生の議論を展開。



- （コーディネーター）前半の発表の中で印象に残った発表や聞きたいことなどは？
 - （パネリスト）可搬魚道開発の発表が印象に残った。産卵床を整備して実際に産卵シーンを見ると感動するが、魚道を整備して実際に魚が遡上しているのを見た時の気持ちを伺ってみたい。
 - （フロア）もちろん嬉しい。特に今回は北海道でのサケという大きな魚を対象としたチャレンジングな取組みで、模型実験も行い、現地で成功した時は感動し、そのまま寝込んでしまったほど。
- （パネリスト）今紹介頂いた四国と北海道の可搬魚道づくりの連携は、前回の2019年に開催した小さな自然再生神戸サミットをきっかけに始まったので、本日も是非新たな仲間が繋がる一日にして欲しい。
- （コーディネーター）札幌工業高等学校によるサクラマス産卵場づくりの取組みに関し、会場より応援メッセージなどをお願いします。
 - （フロア）この取組みはNHKでも紹介されていて、サケの遡上や産卵場づくりに取組む札幌ワイルドサーモンプロジェクト(SWSP)のメンバーとも連携しながら、高校生たちが自分たちで考えなが

ら取組まれていることが素晴らしい。サクラマスという川全体を使う魚種を対象とした取組みを、是非とも他の高校生にも広めて頂きたい。

- (フロア) 産卵の確認以外にも激熱な経験は？
→ (パネリスト) 活動をする中で、これまでもサクラマスの産卵を見てきた「近所のおじさん」が自分たちの活動に協力してくれてアドバイスを頂けたことが激熱。
- (コーディネーター) 色々考えながら取組む中で、産卵場づくりの中で作業面、技術面等で最も大変だったことは？
→ (パネリスト) 作業は重機などを使わず人力で行っが、バケツ 65 杯分の砂利を運び肉体的にも大変だった。
- (フロア) 自然の営力を活かすと、作業面の苦労を軽減できるかも。実際、昼休みにお話を伺う中で、65 杯分を運んだ帯工の部分とは別の場所 (川岸の出っ張りのある部分) に自然に産卵床を発見したことで新たな気づきがあったとのこと。次のステップでは、自分たちが砂利を運ばずとも、水の流れの力 (川の営力) を使って産卵床を造ることに挑戦してみると面白いのではないか。
- (フロア) 宮津天橋高等学校フィールド探究部の発表では人間バープの写真があったが、是非その時の感想を聞かせて欲しい。
→ (パネリスト) 寝転んでいるだけでも流れが変わっていき、お尻の砂が無くなったり、変化に驚いた。
→ (フロア) この人間バープの発表以外にも、お子さんが石を積み始めたなど、自らが川に働きかけて、川が動いていくことを実感したという発表が複数あったことが個人的には激熱だった。
- (コーディネーター) ゼロ歳児の川づくりの発表がありましたが、その時の様子などを詳しく教えて頂きたい。
→ (フロア) ゼロ歳の石積みは本人の意志かどうか難しいが、横の 3 歳児のお子さんは自分の意志で楽しく石積みを行っている。目的意識はなく単なる石遊びだけれど、それに価値をつけるのは大人であり、本日のようにたくさんの専門家が集う中で、こうしたことの価値を伝えて頂くことができたので、川遊びのおもしろさや価値を周りに伝えて頂けると、もっともっと川がおもしろくなると感じた。
- (パネリスト) 岡山の発表でも子どもたちによる取組みの話題がありましたので詳しく教えて頂きたい。
→ (フロア) 写真で紹介した当時は 4 歳～5 歳くらいだが、この年齢になると明確に目的をもって取り組んでいた。小さな自然再生の研修会で大人たちがやっていたことを、ただ遊んでいただけではなく見ていたようで、大きな石の間に小さな砂利を詰めて水を溜めたりしていた。これ以外にも、遊びながらバープ工みたいなものを造って流れを早くして、自分たちがそこを流れて遊んだり、遊びの中で水の流れや砂の流れの変化を勝手に学んでいるなあと気づくことがよくある。高校生でも大人でも、遊びながら造ることで学ぶことがある気がする。
- (コーディネーター) 石を積んだり、自分で川の中に浸かって流れを感じるなど、実際に川に働きかけるような高校生たちの取組み、発表に対してコメント、アドバイス、質問等があればお願いします。
→ (フロア) 北海道にはたくさんのサケ科の魚がいる中で、サクラマスをターゲットにされた理由を教えてください。

- (パネリスト) 自分たちの先輩たちがサクラマス産卵床づくりを課題としていたので、それを自分たちも取組もうというのが一つ目の理由。また、上流に魚道があるものの河床低下のため増水しないとサクラマスが遡上できない状況がある中で、サクラマスの保全のためにこの区間での産卵場を増やしていく必要もあった。
- (フロア) 宮津の大手川取組みでは、安全管理面で気を付けていることなどがあれば教えて欲しい。
- iRICで増水時のシミュレーションなどを行うとともに、2004年の大水害時に被災された方々にお話を伺うことで過去の洪水時の様子を学び、川の怖さを知りながら、安全で健康な川とはどんなものかをフィールド探究部内で議論している。



<後半> 二名の発表者(福井かひる山 風土舎・吉田さん、NN ラントシャフト研究室・西山さん)及び兵庫県立人と自然の博物館・三橋先生をパネリストに迎えて、川に至る上流域の森でできる小さな自然再生の議論を展開。

- (コーディネーター) はじめに、事例発表では伝えきれなかったこと、悩み事などを教えて下さい。
 - (パネリスト) 取組に際しての困り事として、資金集めの方法や利用できる制度を調べる前に団体を立ち上げたため、今後の継続策について現在模索中の状態。
- (パネリスト) 幼稚園のお父さんたちの熱量が高く、未来を担う子どもたちのためというモチベーションから活発に参加いただいている。子どもの学びと親自身の学びがエネルギーになると感じており、力を持ち寄ってくれる方々のおかげで持続している。



- (パネリスト) 山の中で活動に取り組むような幼稚園に通わせたいという方が多い？
→ (パネリスト) そうした口コミで園を選んでいただいた方もいれば、近所にお住まいと理由で選ばれた方もいる。
- (パネリスト) 5トンの石組みは大変。少し手を抜く手法（例えば、丸太を使う、川幅を広くして落ち葉がたまるようにするなど）や、ワクワクする新しい手法を考えながら取り組むことも長続きの秘訣。また、すぐ分解する葉を選ばれているとのことだが、分解に時間を要するスギなどの葉とのミックスでもよいかもしれない。分解が遅いということは長持ちするということでもあるので。未開発の分野なので、色々なハイブリッド技術を試して欲しい。
- (パネリスト) 全国の保育園で実は色々な取り組みをやっている。そのメニューを集約した「保育園による小さな自然再生技術集」みたいなものができるとおもしろい。
→ (コーディネーター) ご発表頂いた幼稚園の取り組みをまとめるだけでも素晴らしい図鑑になると思う

が、今後そのようなご予定は？

→（パネリスト）お知らせしたいことはたくさんあり、本を作りたいなあと考えている。源流域の安定化に向けてあり材で造ることや、簡易的な技術も色々議論ができそうだと思う。安全過ぎない、歩きやすくし過ぎないなど、子どもたちが場所を選ぶ余地を残す部分と最低限の安全のバランスをいつも議論している。

- （フロア）幼稚園での取組について、ここで学んだ子どもたちが、その後どんな活躍をされているかの追跡調査などはされている？

→（パネリスト）是非やりたいけれど方法が分からない。是非やり方を教えて欲しい。

<第1部 まとめ>

- （フロア）午前の事例発表を聴きながら、魚道の技術が前回の2019年のサミットの時よりも格段に進歩した印象を受けた。7年前のサミットもきっかけとなり、全国のいい技術が横方向で繋がってきている印象がある。次の一手を考えた時、ある場所での素晴らしい技術が横展開され、さらに工夫がなされてよい技術となっていくサイクルに入っていると感じた。
- （コーディネーター）前半と後半を通じて、教育と技術を繋げていくことの大切さを再認識した。前半にも紹介頂いた通り、子どもの時から川の中に入りモノを造るという経験から川に関心を持っていただき、パネリストとして登壇頂いたような高校生達へと成長し、自然再生の仲間になって流域をよりよくしていく活動へと広がっていけば素晴らしい。



【第2部：小さな自然再生の進め方（ソフト）】

（コーディネーター）佐藤 祐一：滋賀県琵琶湖環境科学研究センター

発表者（わけっこパーク・熱田さん）及び兵庫県立人と自然の博物館・三橋先生をパネリストに迎えて、小さな自然再生の進め方について、次の一手に向けた「本当の課題は何か？」を深掘りして議論。

（第2部の冒頭で掲示）サミット事務局による小さな自然再生の課題の整理結果

悩み/不足	意味	再分類
教育継承課題	教育・継承の仕組みづくりや次世代への引き継ぎに不安がある	<ul style="list-style-type: none"> 教材・プログラム設計の難しさ 人材継承・次世代育成の難しさ 共有知化・地域知の継承
仲間不足	参加者や担い手・仲間づくりに課題を感じている	<ul style="list-style-type: none"> 参加者の獲得・維持 コアメンバーの不足 多主体連携の不足
資金課題	活動継続のための資金・支援の確保が課題となっている	<ul style="list-style-type: none"> 活動費・整備費の不足 助成金・申請力の不足 持続的財源確保の不安
発信・情報提供の不足	活動内容の発信・広報・可視化が十分にできていないと感じている	<ul style="list-style-type: none"> 広報・発信力の不足 記録化・ストーリー化の不足 展開の型不足
行政接続・合意形成不足	行政や関連団体との接続や手続き・合意形成の進め方に悩みを抱えている	<ul style="list-style-type: none"> 行政との事前協議の不足 許認可・制度のわかりづらさ 合意形成の困難さ

【①最初の一步の突破口】

- （コーディネーター）5つの課題は普遍的な課題であるとともに、実は独立しているものではなく、相互に関係している。（例えば、仲間が足りないけれど、広報をすれば仲間は増える、しかし広報のお金がない etc.）そこで、小さな自然再生を取組まれてきた皆さんに、**どんなことを突破口にしてきたか**をまずは伺ってみたい。「色々な課題はあるけれど、突破口はどこだったか？」「これで最初は進んだよ」「これで一步踏み出せた」というヒントを教えてください。
- （パネリスト）色々な事例を見てきた、関わってきた中では、「超簡単」しかし「そこそこ効果がある」ということが大事。外来種の駆除にも関わっているが、分厚いマニュアルを渡されても読まないが、「これだったらできる」という、小さな小さな技術の様なものがあり、体でメカニズムが分かり、改良により自分事になり、それが拡張していくことが大事ではないか。
- （パネリスト）子どもたちの居場所づくりを目的に活動する中で、川もその居場所の一つと考えた

時、小さな自然再生の現地研修会が大きな突破口になった。ママ友が前年度に別の場所で開催された研修会に参加し、自分たちの場所でもやろうと盛り上がり、小さな自然再生の研修会に応募して開催頂いた。その中で「自分たちでもやっていいんだ」「川に石並べていいんだ」というのが突破口だった。その後、細々と続けながら、行政とつながる突破口を見つけているのが今の状況。

- (フロア) 前年度に研修会を紹介したママ友です。町の中央を皆が愛する川が流れているが、川と交わる取り組みが無い中で、滋賀県立大学・瀧先生の協力を得て川での取組を仲間を巻き込んでスタートした。川の専門家が来ていただき、分からない時に聞ける人がいることが、現在の活動に繋がっている。
- (フロア) 京都で魚道づくりに取組んでいる。誰でも出来るような簡単な技術ではないが、団体の中にアイデアマンがいて、モノづくりを得意とする仲間がいたことが突破口であり、自然再生を上手く継続するにはそうした仲間を引き入れていくことが大事。また、自分たちの仲間には釣り人、魚釣りが好きな人が集まっている。釣り人は行政や先生や商店街までたくさんの業種の方が含まれ、継続性も担保され、仲間を作るときに自分事として考えることができる好き者を集めることが突破口になる。
- (フロア) 宮津での高校生たちの取組みに関わってきた。吉野川第十堰が縁で生まれた「川の学校」及び「川塾」があるが、宮津の大手川において地元の農家の方々と話す中で魚を捕るだけではなく魚を増やしたいということ、この地でも川の学校をやろうということになった。川の作文を子どもたちが書くことで（当初反対していた）親や祖父母の支援を得て、専門家の協力も得ながら活動が広がってきた。ただ楽しいではなく、きちんとお土産を地域に持ち帰る、子どもから大人に伝えるという取組が一つの突破口になった。



【②活動を続ける中での壁】

- (コーディネーター) 突破口として、技術の話、聞ける人やアイデアマン、自分事にしてくれるような人の存在、子どもから大人へと伝えていくなどが突破口として挙げて頂いた。次に、少しフェーズが進んだ話として、突破口で一步進んだ後、**活動を進める中でぶつかる壁**についてお話を伺いたい。
 - (パネリスト) 子どもたちと川の活動を行う場所に浚渫工事が入っている。安全に向けて有難いことであるが、一方で子どもたちが観察していた魚の死骸が工事の後であるのを見ながら、もう少し早く教えて頂けてたら予め救出できた面もあり、どうしたら地元の意見も踏まえ一緒に考えながら工事を進めていけるのかという壁に直面している。
 - (フロア) 滋賀県で活動を行っている。バーブ工を自由使用の範囲で造りたいと河川管理者に事前相談したが、工作物設置に当たるので認められないと傷が深まり断念したことがある。
 - (フロア) 滋賀県の別の地域で活動している。助成金を得て擁壁に石を積んで魚の棲み家づくりをしようと河川管理者に問い合わせたところ断られてしまった。
- (コーディネーター) 河川管理者との交渉が一つの壁としてある中で、どうしたらよいでしょうか？
 - (パネリスト) 無理なものは無理。例えば、バーベキューの延長みたいにまずは自由使用の範囲の小さな小さな取組みを行い、その効果を見せて対話し、少しずつ大きくしていくなど、まずは小さく始めることもある。一方で、例えば治水安全度に悪影響が生じるなど、ダメな場所はやはりダメ。その場合は河川管理者が丁寧に説明してくれるので、別の場所を探すなどの潔い諦めも必要。「環境改善の取組は善、土木事務所は悪」みたいな誤った認識ではなく、丁寧な対話が必要。
 - (フロア) 「河川管理者が分かってくれない」という議論は小さな自然再生が拡がり始めた初期の頃からずっとあったが、例えば河川管理者の OB の方など役所の論理を理解した方が自分たちの仲間にいたり、役所と上手にやる方法を熟知している大学研究者に応援頂くなどが初期の突破口として言われていた。
 - (フロア) 同様の問題にいつも直面しているが、バーブ工を設置するとか、浚渫のタイミングでコンタクトをとるのではなく、日常の川での活動（子どもたちとの川のイベント等々）から河川管理者や漁協と一緒に取組み、相互の信頼関係を構築しておけば、自然とステークホルダーの一人として河川管理者側から工事の際の相談等が来るようになるので、日常からの関係づくりが大切。
 - (コーディネーター) 最初のきっかけが要望だと相手も構えてしまうので、それよりも前のステージから顔を合わせておくことが大事。
- (コーディネーター) 河川管理者以外の壁についても是非よろしく願います。
 - (フロア) 教員の立場から。子どもたちとともに取組む活動のため地域で色々動きやすい良い点がある一方で、教員の異動の問題があるため、地域に新たな活動を仕掛けた後に、その活動を緩く拾ってくれる中間支援組織の様なものがあれば有難い。（活動を引き継ぐ新たな教員が現れるまで緩く活動を維持してくれるような役割）そんな事例があればご紹介頂きたい。



- (コーディネーター) 教員に限らず、人事異動が宿命の職場においても同様の問題があると思うが、何か関連する話題があればお願いします。
 - (フロア) 県土木事務所の立場から。自分が異動後は何も進まなくなったというケースがあり、担当する部署を異動後も関わっている川は何とかなっているが、そうでない川はなかなか引き継がれないのが現状。
 - (フロア) 石積みをやった現場に河川改修が入ったり、サケ産卵場に工事が入った時などは大きく落胆したが、強い影響力を持つ大学先生の一声で工事がストップするなどを経験し、壁を打ち破る突破口の一つにそうした神様の様な存在の先生の協力を得ることもあるのではないか。また、若い世代は環境に対する意識が変わってきているので、河川管理者を含め今よりは改善される明るい未来を期待している。更に、河川管理者と交渉力・調整力のある地元コンサルタントの方の協力を得ることも、壁の克服につながる。
 - (コーディネーター) 確かに、役所の方は人事異動で交代されても、長く関わる民間企業の方がその役割を補完するという意味では、先ほどの中間支援的な役割と言えるかもしれない。
 - (フロア) 地元コンサルタントの立場から。上司がどう行政（河川管理者）と交渉し仕事を進めるかを学びながら、自分なりのやり方を見出し、高校生たちの取組みを支援してきた。今回の現場では、河川管理者にも協力頂いており、その背景には教育があり、地域の学校の教育、さらには若手の河川管理者の人材育成（教育）と絡めることで関係者が協力してくれると感じている。コンサルタントとしても、市民と行政とのつなぎ役が我々の大切な役割であると意識して仕事に取り組んでいる。
 - (フロア) 元県の職員（河川管理者）で異動する側だった立場から。自分が異動する際に地域

の団体の方に必ずお伝えしていたことが『自分が異動後に行政の対応が同じようになるとは思わないでください。ほぼ冷たくなると思ってください。そこで、黙っていたらほったらかしにされるので、常にコンタクトをとって、活動の歴史を伝えて、こうしたことをやってきたこと、やっていきたいこと、それは河川法の目的にも含まれる行動なので土木事務所として今までと同じように協力して下さいとプレッシャーをかけて下さい。』ということ。冷たくされたと思うことは多々あると思いますが、諦めず、活動を続けて欲しい。

- (コーディネーター) 今ぶつかる壁として、午前中の発表の中で「地域の中でどう広げるか」「地域の方に関わっていただけるか」という悩みがあったので、この課題についてよろしくお願ひします。
 - (フロア) 地域に活動をどう広げていくかを悩む NPO 法人の立場から。地元で 40 年近く活動しており、地元外の方々をたくさん受け入れて活動を展開してきた一方で、地元自治会や漁協の方々に声を掛けずに進めてきた。これからどう地元の方々を巻き込んでいくかが悩ましい。
 - (フロア) 自治会で活動をしているが、ニュースレターとして回覧板の中に活動を紹介したり、文化祭の際に展示したり、子ども会に声掛けすることで、地域が協力してくれた。
 - (フロア) 地域の新聞報道をきっかけに地域の理解が一気に広まったケースがあった。メディアを通じて活動を紹介頂くことも地域を巻き込むきっかけになる。メディア側も素晴らしい活動を求めているので、活動側から投げ込みを行うことなども有効ではないか。
 - (パネリスト) 河原の草刈りやワンドづくり、鵜が多い時に追い払う際に、地元のお年寄りから協力の声掛けやお礼を頂くことが多い。地元の川がきれいになる、魚を増やすことに対しては地元も歓迎するので、日常の小さな活動の中でじわじわ広げていく、広がっていく気がする。また、現地研修会も新聞報道頂き、それを回覧板で地元にお伝えすることで協力者が増えたと思う。
 - (フロア) 課題を共有するというよりも、団体毎に思惑があり、例えば農家であれば水の詰まりの解消、観光事業者なら景観の改善、生きもの好きは魚が増えて欲しい、銀行であれば地域振興がしたい等々があり、それを活動に集約し一緒にやりませんかと巻き込み、活動を広げていくことができる。一つの目的に絞らない緩さも大事かもしれない。

【③活動の目標・出口】



- (コーディネーター) 始まりの突破口、その次にぶつかる壁の話をしてきたが、最後に「何を指すのか？」という目標や出口の議論をさせて頂きたい。「皆さんの活動は何を目指してやっていますか?」、「その目的が達成されたら活動を終わめますか?」と問われた時に皆さんはどうお答えになるでしょうか? 小さな自然再生に取り組まれる方々は、活動を進める中で当初と違った目的に気づかれる方も多いのではと感じています。この「目標」を捉え直すことで、課題が実は課題ではなくなることもあるのではないかと感じています。そんなことを残りの時間で考えていきたいと思っています。
- (フロア) 長年に渡り手づくり魚道に取り組んできた経験から。環境と共生した酪農、持続可能なふるさとづくりの様な目標からスタートしたが、世代が変わることで当初の目標と活動が引き継がれない経験をした。その中で、「その人にとって何が価値なのか」をきちんと仲間と共有しておくことが活動のエネルギーになることを学んだ。
- (コーディネーター) 魚道が強固になったり本設化されることで、人の手が関わらなくなることが、結果的に人の関与が不要となり、人が離れることに繋がっているのではという疑問が湧いてきた。むしろ、たくさんの課題があり、その課題の解決に向けて皆で汗をかく行為そのものが実は活動の根幹となっている、課題があるから仲間と繋がれると考えると、むしろ課題を持つことは大切ではないか。目標をどう捉えるかによっては、課題感も変わる(課題が課題ではなくなる)という気づきがある。
- (フロア) 魚道の取り組みでは目標は魚を遡上させるという比較的明確ではあるが、きっかけはそれでも、継続することが大切であり、当初目標がクリアされても(イベント開催など)継続していける

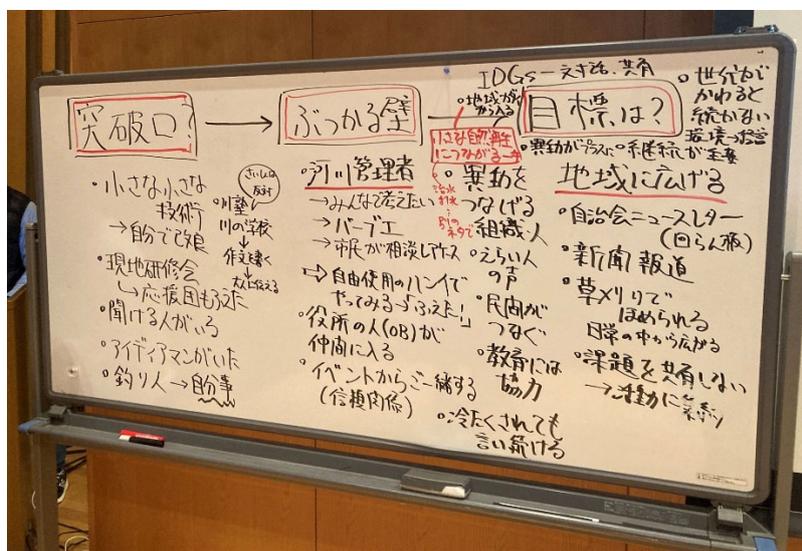
ような仕組みを考えることが大切だろう。河川管理者も異動で交代し、環境の取組みに理解のある方、そうでない方が担当される中でも、継続しているからこそ対話と改善の取組が続けられる。

→ (フロア) 先ほど「何が価値なのか」というお話があったが、最近は SDGs の次に IDGs (Inner Development Goals) が注目されており、SDGs 実現に向けては自分たちがどういうことに価値を感じ、どういう未来を願っているかを継続的に対話することの重要性が指摘されている。活動の目標や出口の議論の大切さを改めて感じた。

● (コーディネーター) 最後に、パネリストより一言ずつお願いします。

→ (パネリスト) 小さな自然再生マインドを持つ川ガキを未来に向けて育てていきたい。

→ (パネリスト) 最後の目標の話題はかなり重要だけれどこれまで議論がされてこなかった。地域と小さな自然再生に取り組む一つのアプローチとして、目標として環境保全から入らず、地域課題の解決から入り、環境保全に繋げることで、トータルに地域課題も環境保全も解決できる可能性がある。本日の様々な取組みを学びながら、一般教養や多様な技術の必要性を思い知らされたので、次の一手は、小さな自然再生に引き寄せるための必殺技、小さな自然再生につながる治水や水質改善等の組み合わせの必殺技となる次に一手が次のサミットで続々と出てくるとおもしろい。今回の小さな自然再生サミットのイラストの左上にはオープンスペースの余白があり、次のサミットでは、この余白に森の幼稚園等が加わることを期待している。



パネルディスカッション ①

魚道と魚の「暮らし」?

成功はあんなにうれしい
記事は読むだけで手間は不要...
ちゃんと読むとよかったです

産卵以外で
漁業の「役割」は?

近所の「おじいちゃん」...
ササガエを育てる

大変だよね?

「自力」(子どもたち)は
大変だよね?

流れを生活の「こと」がわかる!!
「土」が
「水」が

人間バ・フ
可能な「こと」は?

原田先生 (アウグスティン!!
参加者からもうごした報告あり!!

子どもたちが「石積み」
「おもしろい」

川の「うごき」が分かる!!

子どもたちに「石遊び」
「おもしろい」見方を考えたい!!

小学生は
大人を見て? 遊びながら
可能な水の「うごき」を学んでる!!

クリスマスは「し」は
「F」?

「安全」は「か」は
「F」?

出水もある
安全に「活動」を「あそび」する?

「F」は「F」!!
「F」は「F」!!

川には「わ」でも
「く」していい
川とどう「生き」る?

賞杯あつめが「大変」...

「おち」
「5」!!

「果」は「か」合
「下」流から

「シルバ」-「セ」-
「ガ」
「中」の「ま」らう

木の「根」は
「切」らな
「不」可「逆」転

「資金」は?

「教育」は「子」ども
「の」ため

「石」積みは「こ」も
「き」きう!!

「手」を「振」って
「次」の「一」歩!!

「11」人「は」こ
「も」
「や」こ
「中」心

「学」びたい人は
「こ」こに
「い」る!!

「車」輪を「広」げ
「て」い

「最」低限の「安」全
の
「バ」ランス

「育」った子ども
「た」ちの
「追」跡は?

「し」た「い」で「き」き
「は」い...
「や」り「方」が...

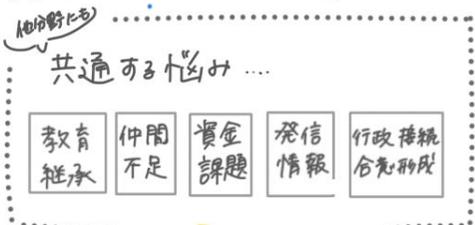
「魚」道の「進」化

「川」の「ま」を
「と」れ「と」れ
「の」こ
「進」化「さ」せて
「い」る!!

作成： 清水麻依 (パシフィックコンサルタンツ株式会社、滋賀県立大学 瀧研卒業生)

2025.12.7 開催 『小さな自然再生サミット 2025 京都大会』 パネルディスカッション グラレコ (2/2)

110パネルディスカッション②



突破口は?

小さな自然再生
より **小さく**

小さな自然再生
現地研修会

川の専門家
つながり

地元
の理解
いざや...

アイデアマン
を仲間!!

子どもたちの
作文 活動のあかり
おかげで

この山に
いかに
お世話な...



突然の
しゃんせつ工事案内
どうしたら
みんなが考えよう! となるだろう?

行政との関係

行政にきたら
ダメになった

行政OB
うまじや方法を知る研究者

普段から行政と一緒に活動を!!

行政OB
うまじや方法を知る研究者

行政OB
うまじや方法を知る研究者

行政OB
うまじや方法を知る研究者

地域に広がる

- 国紙 + ニュース 地域内に発信
- 新聞報道
- 日常のかかわりで
川がよくなることはみんな歓迎

教員: 行政職員との移動...

中国支援 民間

教育 したい!!

環境教育
若手研修

担当者
移動してめづるな

コネクティブな関係!!

忘れさせない!!

取組が進んだ
その先は...?

その人にとって何が
価値なのか?
環境
企業
経営??

魚道の本設化
楽になった! けど 離れてしまった...

課題があるといいいことじゃん!

継続が重要!

原点に立ち帰る
しいりに
した!

魚
小川

next!
小さな自然再生につなげる
組み合わせの **必殺わて**

作成: 清水麻依 (パシフィックコンサルタンツ株式会社、滋賀県立大学 瀧研卒業生)

6. 閉会

事務局を代表し、(公財)リバーフロント研究所の代表理事・塚原浩一よりご挨拶を差し上げました。



皆さま、本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございました。サミット実行委員会の事務局を代表してご挨拶をさせていただきます。

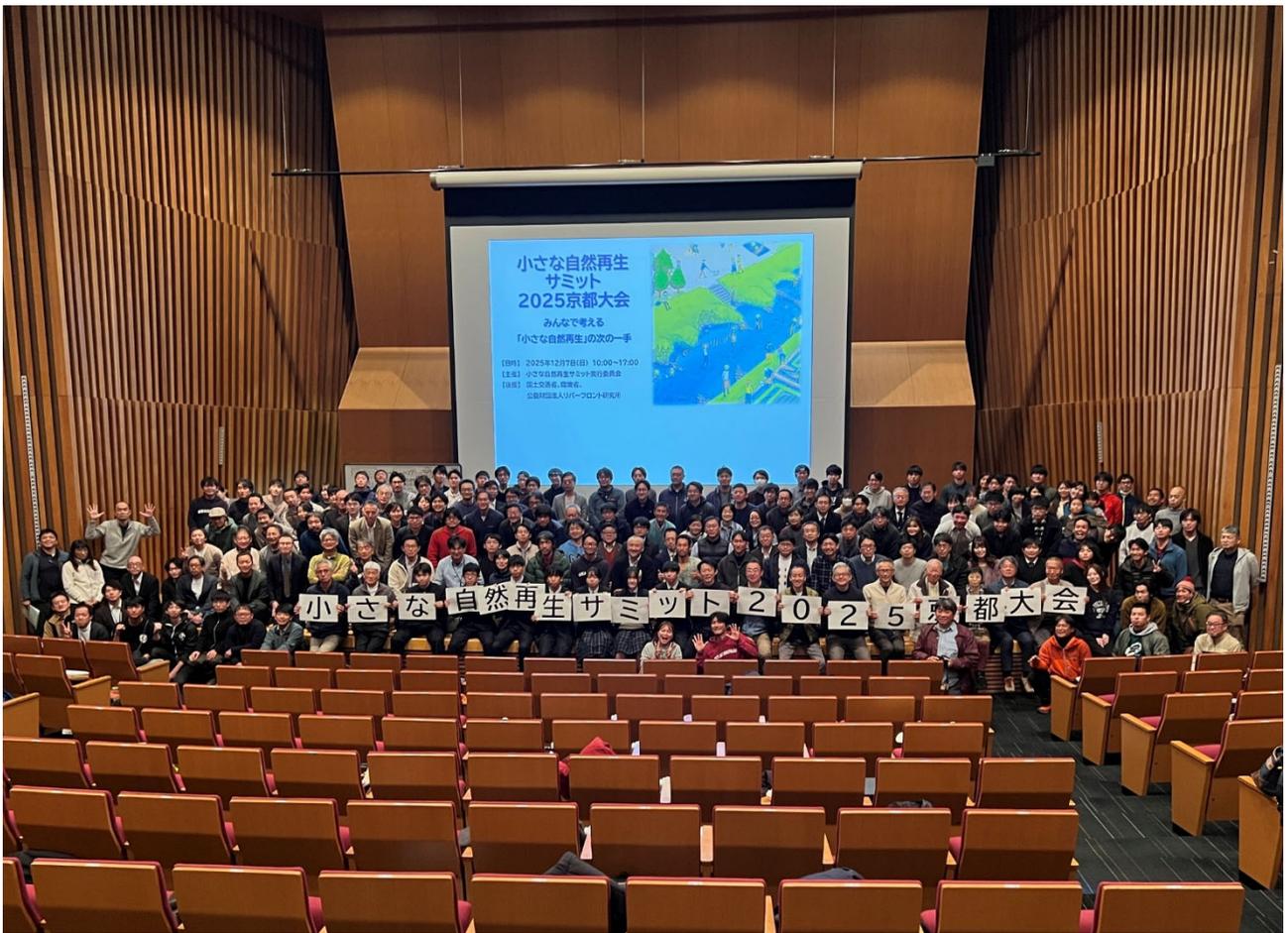
私自身、長年に渡り河川に関わる仕事をしてきた中で、こんなに中身の濃い集まり、議論の場は初めてで、とても充実していて刺激を受けました。どうもありがとうございました。

第2回目となる小さな自然再生サミットを是非また開催しようと提案させて頂き、実行委員の皆様、そして事務局メンバーの皆さん、どなたも大変お忙しい中で、このような素晴らしい会に仕立てて頂いたことは本当に感無量です。様々な課題がたくさんある中でも、皆さんがそれぞれの現場で工夫して進めて頂いていることを学ぶことができました。

以前に、リバーフロント研究所が発行する機関誌 Riverfront の巻頭言で、「小さな自然再生を大きく育てたい」と寄稿させて頂きましたが、是非とも皆様にそれを実践頂きたいと思います。

技術的な課題、ソフト的な課題はたくさんありますが、小さな自然再生に関して一番大切と感じることは、川や生き物、自然に対する愛情やリスペクトの心を育てるには、これほどいいアイテムはありません。川に入って働きかけをすれば、人間バブではありませんが、すぐに川が反応してくれることを体験できます。行政だけではなく、市民の方、企業の方と一緒に取組む輪を拡げるためにも、自分のフィールドで頑張ってくださいとともに、その取組を是非とも全国にご発信頂き、小さな自然再生を全国に拡げていくことにもご尽力いただくと有難いと思います。

本日はどうもありがとうございました。

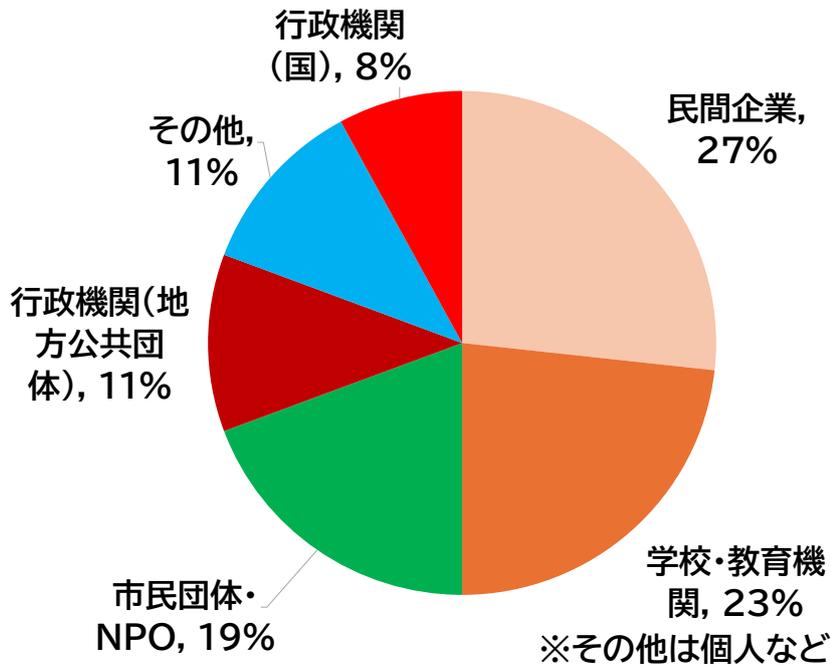


閉会後の記念撮影

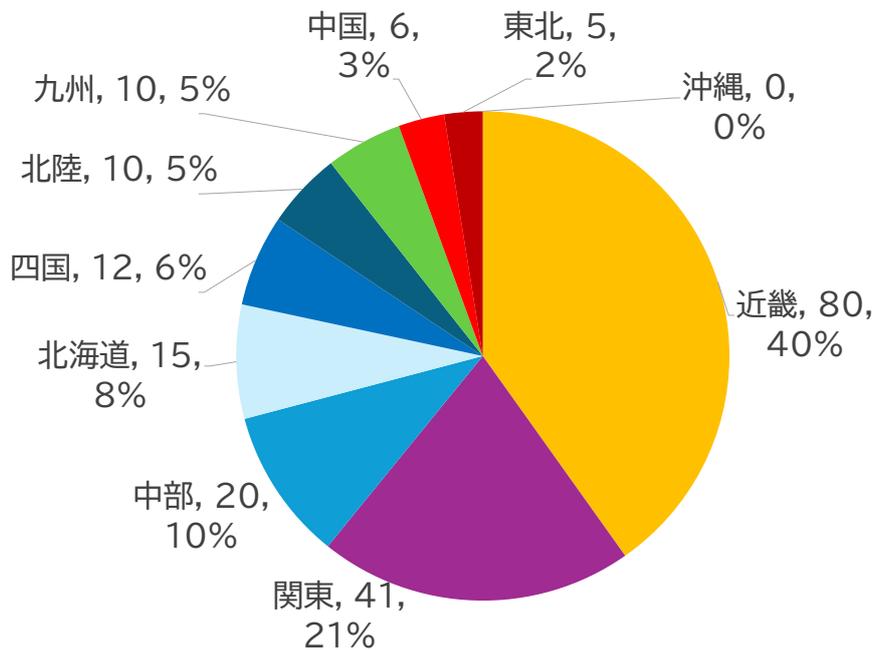
7. 参加者属性 及び 会場の声

本サミットには、北海道から九州まで約 200 名の方々にご参加頂きました。
参加者の所属 及び 地方構成は以下の通りでした。

<サミット参加者の所属>



<サミット参加者の地方構成>



また、サミット会場では、QRコードによるコメント入力ページを設け、フロア参加者より事例発表やパネルディスカッションに対する自由なご意見を頂きました。参加者より頂戴したコメントの一部を紹介します。

1. (午前) 全国事例発表でのコメント

No.	会場コメント
1	フィー探頑張れ！
2	今日はよろしく願います
3	楽しみー！
4	武田さん、ガンバ
5	発表、情報交流で、本日お世話になります
6	今日はよろしく願います 🍷
7	ワクワクしてきました
8	『瀬名新川★ 生き物育て隊』さんへ 地域の人々を巻き込んだ長年の取り組み、発表を楽しみにしています！ 関西静岡県民会メンバーより
9	カンペなしで堂々と話されていて素晴らしい 🍷
10	みなさんの取り組みや思いが激アツですね。
11	すごい！プレゼンめっちゃ上手！
12	産卵の確認以外での激アツな事もありましたか？
13	生まれたサクラマスが海で鍛えられて、再び産卵床に産卵するため戻ってくるといいですね！
14	北海道札幌工業高校へ 自然の営力を活かそう！
15	No.1 サクラマスが経年的にどれだけ増えたかも知りたいです。
16	学生による取り組みであるが故に数年単位でのメンバーチェンジが不可避。 であるが故に希望されるのは「先輩たちと語り合いたい」グッときました。 熱量が世代を超えて地域に定着、社会を変えていくことを切に願います！
17	手作り魚道、維持費などは幾らくらいかかるのでしょうか？
18	我々の自然共生サイトの維持管理に手こずっています。維持管理が簡単な方法への移行探っています。
19	手作りのよさ、壊れるから気にするという視点は新たな気づきになりました。
20	同じ構造で本設魚道を設置してください。
21	三郎川の三角水制について、どのように壊れてゆか分かれば治し方はあると思う
22	関心の低下、維持管理。これから自然再生を始める私たちには、未来に来るべき課題と感じました。先駆者として、課題にどう取り組まれるのか、またお聞きしたいです。
23	霞ヶ浦の植生浄化の機能評価が知りたい。
24	みんなが同じ悩みを持っているな～。
25	釣りをされている皆さんの思いから始まったということですが、もともと繋がりがあったみなさんだったのでしょうか？
26	竹束を沈めるというシンプルさが持続的にできる取組と感じる。応援したいと感じました。
27	うちの軒先が川で、水害に遭い、いまだに工事が続いていて、水性生物たちが心配です。竹束で雑魚爆増、やってみたい！
28	雑魚...魚種は？
29	竹束は出水期はどうなるのでしょうか？流される？
30	雑魚の種類が気になります。オイカワ、カワムツだけでなく、フナや底生魚も見られるのでしょうか？
31	普通種が普通にたくさん見れる川を... 印象的です！共感します！
32	No.4 集まった魚の種類が知りたいです。こういう調査もできると良いですね！
33	馬頭高校さんへ 巨石を使った事例を詳しく聞きたいです。
34	普通種が普通に沢山いるって素敵！
35	更北中さんへ 中学生達の興味をもってやってみたいことへの探求心が素晴らしい！色んな切り口が生まれてる！
36	昔の道具を、3Dプリンターで解き放つ！って、すごく面白い。
37	教育の現場のアナログな挑戦と体験は本当に大切だと感じます。 車にスマホにAIに浸り続けてしまい、そこから抜けるのは難しいですが、アナログな体験の面白さに触れ、関心が向くきっかけは意識して作っていかなくてはいけないと、とても共感しています。
38	先生の探究心から子どもたちに広がる取り組みはとても素敵です。どんどん広がりますね。
39	私もアメリカザリガニ対策に困ってます！

No.	会場コメント
40	長野と鳥取、距離を越えたコラボがどう実現したか知りたいです。
41	生物多様性増進の活動としてザリガニを駆除するという活動はアピールポイントになります。
42	No.5・6 先生の異動後も活動がつながる仕組みがあると良いですね！ あと、アメリカザリガニがいても、それを減少させるという活動目標を立てたら自然共生サイトに登録できると思います。
43	西粟倉でも山崩れが問題です。私も消防団として困っています。
44	高山村の事例ですが、ザリガニいても、自然共生サイトに申請できます。
45	事例1：学校活動の継続とともに地域の釣り人などの市民との協力を目指すと良いと思います
46	すごい！石積みやしらがぐみ、誰か指導する人はいるのでしょうか？
47	職場環境のマネジメントの考え方として心理的安全性が重視されますが、健全な子供若者を育む地域社会にこそこれが必要だと再認しました。 子どもたちは身近な自然や地域の生業や伝承に対して敏感です。もっと知りたい守りたい。 しかし大人社会は目下の経済活動最優先で、論理的に地域社会を語れなくなってしまっている。 未来を育むためにも、小さな自然再生の機会を通じて、私たちが果たすべき役割ははかりしれません。
48	田んぼや元田んぼ(耕作放棄地)をピオトープ利用する場合、農地法や水利権は各団体どのように対処・くぐり抜けているのか。
49	水の道Pですが、石積みでなくてもできそうですよ。
50	事例8：土留めに竹蛇籠を利用すると竹林の対策ともコラボできるのでは！
51	体験プログラム、ぜひ教えて欲しいです。
52	激アツな経歴！！
53	事例9：富士川流域や富士宮市の河川んの特徴を保全や再生の目標にすると良いと思います。
54	リバーフレンドシップ制度について知りたいです
55	福井かひる山風土社の吉田さん、手仕事治水の果実として、野鳥の声に耳を傾けてみませんか？ 5月末、6月には渡りの鳥たちの恋の囁きが聞こえるはずです。 https://www.uminokyoto.jp/column/post/29/
56	瀬名新川 中村さんへ。図鑑なら神戸の玉一アクアリウムだと思います。
57	ザリガニに困る方へ。ザリガニ連続捕獲装置なるものがあります。私も今度作りたいたいと思ってます。調べたら出てきますよ。
58	事例4：雑魚の魚種は何ですか？竹束は増水で流れても問題なしですか。
59	石などを組んで川の水の流れを変える行為(バープ工など)は河川法による許可が必要だと思うが、小さな川(農業用水や山際を流れる細流)にも適応されるのか。どのくらいの規模が法に当てはまるのか。
60	事例5：移動した先でも継続できることを見出して続けることが大切だと思います。
61	そんなにたくさんの方の反対に遭いながらも、やり遂げたなんて！すごいです！
62	愛知の川づくり 川瀬様。安宅和人さんの近著『「風の谷」という希望』にあった「ほぐす土木」を重ねてお話し伺いました。河川整備の先進的なお取り組みをうかがえて嬉しかったです。
63	魚道設置、諦めず、長期戦の構えが必要ですね。合意形成大切ですね。 ピワマスの日応援します！
64	事例4：鯉が捕食者として問題となる事実は他の川や池でも有用な知見なので宣伝して欲しい。
65	No.12 ピワマスの日ができるとうれしいですね！ ピワマスの観察会のイベントがあると良いかも！
66	ピワマスの日創設大賛成！ ピワマスの注目度が全国的に上がって嬉しいです。規制についてもっと県や水産課は核心をついた指標で行って欲しいと思っています。規制の場所、方法、時期など。またお話しさせていただきたいです。ありがとうございました！
67	愛知県の川、自然いっぱいになりたいです。バープ工も増やしましょう。魚道ももっと増やしましょう！
68	IHIさんはなぜこの場所を活動場所に選ばれたのでしょうか？
69	伊藤園様は従業員参加ですか？資金援助もされていますか？
70	横の人の電話の感じ、めちゃわかりますー！！
71	小さな自然再生、どんどん増やして、大きな自然再生になりますね。 小さな自然再生ブーム到来しますように。
72	大変素晴らしい試みだと思います。産卵床造成の場所選びをもっと魚の目線で科学的に検討するべき！
73	人間バープ、最高です！
74	井桁魚道 屋根をつけるアイデアがすごい。
75	No.16 人間バープは、面白そう！ どういう風の流れが変わるかを確かめると、より探求になるかも？
76	宮津天橋さんへ増水時などの安全管理はどうされていますか？
77	みんなの川塾さん、とても興味深いお取り組みの発表をありがとうございます。 人間バープ、やってみたいです！！
78	人間バープ、最高!! 採用します！
79	福田川 村上さんへ。もんどのドッグフードとお茶袋の組み合わせになった経緯を詳しく教えて下さい。

No.	会場コメント
80	もんだりのエサ、ドッグフード以外にも他にもいろいろ試されたのでしょうか？
81	福井かひる山 風土舎さん。とても興味深いお取り組みのご発表をありがとうございます。 機会があれば、石津みや、しから編みを、体験しにうかがいたいです。 お昼に、お話を伺いに行きますね。
82	県土木事務所との、“ゆるやかな”連携を具体的に知りたいです
83	はっぴ欲しい。
84	なんで篠山市はこんなことができるの??
85	丹波篠山 ふるさとの川づくりさん。子どもたちが遊べる川づくり素敵ですね！
86	西粟倉村この前テレビで特集されていましたね。関係しているのでしょうか。
87	波賀野川の石組魚道は二段とももう少し良いやり方があったのでは？特に上側の段は斜路のようになっていて、できるだけ河道内を横方向に有効活用して畑川の魚道のように、端から反対側まで距離をとって、勾配を緩くしてあげたら良かったと思います。下段に関しては石組のプールをもっと大きくしてら良いと思います。
88	京都鴨川鮎魚道。壁沿いに魚を導くアイデア、よく聞かせていただきました。いい方法を教えていただきありがとうございます。
89	株式会社エーゼログループ 太刀川さま。西粟倉村、土中ラジオなどで先進的な活動を拝聴し、注目していました。 山林のお取り組みだけでなく、ピオ田んぼづくりなど、流域全体で活発なお取り組みがあるんですね！ お話をうかがえて嬉しいです。いつか、西粟倉村にも伺ってみたいです。
90	素晴らしい!!!!
91	小さな自然再生マインドもった川ガキ。パワーワード
92	小さな自然再生マインドを持った川ガキ、いいですね。
93	川ガキいいね👍
94	わけっこパークさん。子どもたちが川で遊べる日常、すてきです💎💎💎
95	日笠川の熱田さんへ。小さな自然マインドを持った川ガキが増加中が素晴らしい！ 今日は、河川管理者の偉い人達が集まっているので、相談したら解決する糸口が見つかるかも。
96	川塾さま。川で遊び育てる子どもたちが羨ましいです！ とても刺激をいただきました！
97	神山つなぐ公社さま。土地を深く知る先達とのつながりづくり、素晴らしいです！！
98	家棟川ビワマス。ビワマスプロジェクトは、生き物への貢献がビワマスの遡上・産卵という具体的で明確な指標で実感できていいですね。
99	熱田さん、日笠川の川がきは、日笠川の専属コンサルタントですね。河川管理者（地元土木事務所）に相談して河川愛護団体に登録してもらえませんか？ 川の中の生き物たちの代表として、彼らの住処を教える先生になってほしいです。あの石の下が○で、ここは□ だよという情報を土木事務所の人たちが知ったら、きっと放っておけないのでは？ それを地元の高校の理科の先生に相談したら、総合的な探究の時間のキラーコンテンツになるのでは？ フィー探は高校生が親子を巻き込んでますが、日笠川は川ガキが高校生や土木事務所を巻き込むことができそうだなと思いました。保全の知恵袋は、ここにあります。ないのは、川ガキたちが見てる川の中の世界です。日笠川の住民マップを見てみたいです！
100	すくすく森…非認知能力の育成。卒園までに育て欲しい10の姿。小学過程でやしなう生きる力への連続性辺りが「あそび保育」の社会認知に効果があると思います。野外での学びの洗い出しかな。
101	九州産業大学さんへ。サークルを作られた際に資金面でお困りでしたら我々の学生を対象とした未来につなごう助成も参考にさせていただきます！
102	NPOの活動と大学の授業を連携するには、どうアプローチしたらいいのでしょうか？
103	湿地づくりとは掘って掘って掘りまくることなり
104	どのようにして川の水を抜きましたか？
105	銀行さんへの参加アプローチの仕方、掴みどころを教えてくださいたいです。
106	「すくすくの森」 小さな自然再生は 川だけではなく 森にも広げることができる。そんな画期的な事例だと思います。

2. (午後) パネルディスカッションでのコメント

No.	会場コメント
107	保育園が考えた技術図鑑とかあるといいなあー！
108	高校生でこの活動をする方は、幼少期に自然に親しんで遊んだ経験はあるのでしょうか？
109	今日の朝、nhkで真駒内川のサクラマスの特集をしていましたね
110	高校内での盛り上がりは？
111	高校生は特に3年間という期限しかないところで世代交代や組織の継続という点で難しいところはあるか
112	川づくりの活動に携わって、高校の先輩たちの進路に影響があったのかをお聞きしたいです。 そのまま今も川づくりを続けてくれていれば嬉しいな……
113	大人も川遊びを！
114	フィー探の人間バープはなぜ生まれたか。元々は、ガサガサで採れた魚の紹介を土手や公民館でやりましたが、生徒たちが「暑いから川に浸かって聞いてもらおう」と言い出したことがきっかけでした。サカナ取りと川の営みを子どもたちも体感的に学べる方法が、高校生の探究活動から生まれています。
115	水の道を作る場所はどうやって決めるのですか？
116	吉田さんに質問です。資材にかかる費用はどうやって捻出されてるんですか？
117	ハードの次の一手で魚道の話をしてほしいです。
118	県土木や砂防事務所が砂防ダムなどから搬出した不要な巨石を小さな自然再生に横流してくれるシステムが欲しい。
119	魚道関連の取り組みがずいぶん進歩しましたし事例もたくさんありますが触れないのですか？
120	西山さん、追跡調査の方法、私も知りたいです。
121	札幌の中居さんへ。川の段差に石組みを追加して魚が行き来できるようにする専門家、日大理工学部の安田陽一教授に、相談していただくと、現在の課題が解決に向かうと思われます。北海道のいくつかの川で活動されています。私たちは霞ヶ浦で魚道造りを教わっています。
122	小さな自然再生などにおいては「川」を通じて人が集まって支援してくれる団体仲間がいて、人が人へ歴史を紡いでいく傾向があるように感じます。それが強みなのでは？
123	突破口 そこそこ効果があって、これならできそうと思えることから始める
124	三橋さんと同じです。とりえず難しいこと考えすぎる前にやっちゃう。
125	自社の中のキーパーソンや権力者が興味をもってくれない場合、どんなアプローチや作戦があるでしょうか？
126	突破口…個人で役場に話しに行っても相手にされなかったが、任意団体を立ち上げ、具体的な要望（補助制度の立ち上げ）を持って話しに行ったら、今度は時間をとって話を聞いてもらえました。こちらの中の人は同じなのに、こんなに変わるのかと驚いた。
127	情報発信について、希少種の情報、伝え方が難しいですね
128	中学校の話になるが、これから先に部活動が無くなり地域クラブに移行するところが増えると思うので、そこから地域の中に広げていくのはどうだろうか？
129	佐藤さんの仕切りが抜群すぎて痺れる… 話題が逸れかけても、しっかり拾う。
130	後半のパネルディスカッション楽しかったです。みなさんの体験談が参考になる部分もあったと思いました。
131	ボトムアップ。ここに集まっている方は、何らかの課題を自分で発見し、解決しようとする意志のある方だと思う。最初の突破口は、こういった活動層の繋がりや研修会だと思うが、こういった方は既に1段も2段も上のレイヤからはじまっていると思う。一方で、自分から気づいて、行動する人を増やさないことには、上層の活動のまま終わってしまうと思う。全く関心のない人に、関心を持ってもらい、さらには、行動を起こさせるようにするためのきっかけはなんだろうか。小さい頃からの教育、頑張っって腐心する姿をみせること、人を焚き付けること、色々あると思うが、関心のない人が行動を起こせるように、個人の価値を変容させるような取り組みも必要だと思う。

参考資料 1 宮本和宏参議院議員祝辞

約4年前に滋賀県守山市で開催した第13回「小さな自然再生」現地研修会に当時は守山市長としてご参加頂いた宮本和宏参議院議員より、本サミットへ祝辞を頂きました。

メッセージ

水辺の小さな自然再生サミット 2025 京都大会が盛大に開催されますこと、心よりお喜び申し上げます。

本サミットは、地域に寄り添い、小さな自然再生の輪を全国へと広げてこられた皆様の長年のご努力が結実した、たいへん意義深い大会であります。水辺は、生態系を育み、人々の暮らしを支え、地域文化を形づくるかけがえのない存在です。その自然環境を未来へつなぐため、市民、企業、専門家、行政が同じ目標を共有し、ともに知恵を重ねてこられた歩みに、深い敬意を表します。

私自身、国会の場においても、ネイチャーポジティブに向け、自然再生や生物多様性の保全などの確保に向けた政策をさらに前へ進めてまいりたいと考えております。

本大会が、参加者の皆様にとって新たな学びと連携の機会となり、水辺の再生と自然との共生に向けた取り組みが、これからますます広がっていくことを心より祈念申し上げます。



参議院議員

宮本和宏

参考資料 2 RIVERFRONT Vol.93 巻頭言

(公財) リバーフロント研究所が年 2 回発行する機関誌「RIVER FRONT」の Vol.93 (2021 年 9 月発行) では水辺の小さな自然再生を特集しました。以下の巻頭言とともに、是非とも本特集記事をご覧ください。→ https://www.rfc.or.jp/pdf/vol_93/mokuji.html

RIVER FRONT Vol.93

「小さな自然再生」を大きく育てたい

代表理事 塚原 浩一

「小さな」自然再生を「大きく」育てていきたい、強くそう思っています。是非多くの皆さんに、この取り組みに共感し賛同し参画していただくよう心からお願いします。

誤解を恐れず言えば、多自然川づくりは元々は河川管理者目線のもの。これまでも多くの成果をあげてきましたが、河川を管理する責任を負った立場では、地球温暖化・大規模水害頻発のなかで、自然環境のケアには十分手が回り難い、目が行き届き難いのが実情かもしれません。

一方で、治水対策は「流域治水」に舵を切りました。治水も社会全体で取り組むことが求められています。元々は河川環境の取り組みこそがそうだったし、これからもそうあるべきだと思います。

今こそ地域と市民の出番であり、その新しい時代の先進の取り組みが「小さな自然再生」だと思います。社会全体・流域全体で河川環境を守り再生していく取り組みの拡大を目指したいと考えます。

元々治水優先で改修せざるを得なかった河川も、改めて丁寧に手を入れれば自然を回復するポテンシャルを大いに有しています。これからは流域治水の取り組みとそこから生まれる工夫・知恵のなかで、治水機能の向上と自然環境の保全・再生を一体的に図っていく必要があります。流域治水には、グリーンインフラの活用、生態系の保全・創造を合わせて進めることが求められており、「小さな自然再生」はそのコンセプトを体現し大きな役割を担っていくことのできる取り組みだと思います。

「小さな自然再生」はそうしたこれからのニーズに、河川管理者と市民が協働する川づくりで応えるものです。流域の成り立ちやその川の自然の営みを身近で良く知る地域の力と知恵を結集し活かすことが求められます。大規模に多額の予算を使う事業が必要な場合もありますが、それ以上に地域に密着したきめ細かい「小さな」工夫を凝らしていくことがより重要だと思います。そのためには多くの様々な関係者の共感と参画が必要です。川の状態を最も関心を持って細やかに見守ってくれるのは地域の皆さんです。そういう地域のポテンシャルを最大限に活かしていく必要があります。一方で、河川管理者の理解と参画ももちろん重要です。河川の専門技術力と市民力・地域の総合力が協働していくことが大切です。市民と行政の現実的なコラボが大きな力になります。

活動の結果だけでなくプロセスも重視されるべきです。普段からの川の見守りや維持管理と一体となった順応的な取り組み、やってみて失敗してもそれを許容しやり直す、そういう緩やかで息の長い取り組みが求められています。そうした細やかな工夫の中で確かな技術・経験知・現場知が育まれ、それを河川管理へフィードバックしてもらえれば、より良い川づくりが進むことが期待されます。川づくりのあり方を根本的に変えていく可能性もあり、「小さな」ひと工夫がその川にとってのブレイクスルーにもなり得るのではないかと思います。

「小さな自然再生」のよいところは、「できることから始める」気楽さと様々な主体の参加しやすさであり、手軽に得られる達成感・充実感、楽しさの実感だと思います。活動自体が「シビック・プライド」であり、結果として得られる河川環境がさらなる「シビック・プライド」となり、地域の新たな財産となることが期待されます。「小さな自然再生」の取り組みそのものが地域の総合力を上げることにもなります。単なる環境教育にとどまらず地域社会全体としての教育・人材育成システムにもなり得ると思います。

多くの皆さんに「小さな自然再生」研究会の取り組みに関心を持っていただきたいと思います。事務局も、協力いただいている先生方も半ばボランティアに近い活動です。純粋に川を愛し自然を取り戻すことを願う取り組みです。是非多くの皆さんにこの活動を知り共感し一緒に取り組んでいただきたいと思います。地域の財産である河川の自然環境の保全・再生のため、地域自らができることがたくさんあります。まずは「できることから始める」気持ちが大切であり、そこから協働の輪を広げて欲しいと思います。「小さな自然再生」に一度でも関わった皆さんは是非この取り組みを周囲に広げる伝道師として普及活動の努力をお願いしたいと思います。身の丈にあった取り組みを、できることから始めて徐々に広げレベルを上げていく、そういう草の根の運動です。

最後にもう一度、「小さな」自然再生を「大きく」育てていきたいと思います。「大きく」育つポテンシャルは十分あります。是非多くの皆さんのご支援をお願いします。

参考資料 3 新聞記事紹介

本サミットは、毎日新聞で紹介されました。

小さな自然再生へ一手

行政、住民、企業の垣根を越え、身近な川や山で生き物が暮らせる環境を再生する「小さな自然再生」の試みが全国に広がっている。7日には宇治市の京都大学治キャンパスで各地の活動主体が集う「小さな自然再生サミット」（実行委主催）が7年ぶりに開かれ、北海道から九州までの30団体約200人が各地の失敗と成功を踏まえて「次の一手」をどう打つかを議論した。

【安部拓輝】

流域の治水と自然環境の再生を両立させる取り組み。行政任せにするのではなく、生き物の目線でコソコソと手入れすることで身近な自然が変わり、それに虫や魚たちが反応していく過程を楽しむことが「小さな自然再生」の狙いだ。

サミットでは、竹を束にして淵に沈め、小魚の越冬地を設ける活動（栃木県立馬頭高水産科）や、滋賀県の野洲川で小学生が石積みを作り、スコップで川を耕してアユが産卵しやすい川底にする活動（国土交通省琵琶湖河川事務所）などが報告された。府立音津天橋高フィールド探究部は、近くの大手川で夏に子どもと魚捕りをしながら魚が増える川づくりを実践する「みんなの川塾」を紹介。「京の川の恵みを活かす会」（京都市）は鴨川にある遊歩に魚道を掘えアユが超えていく姿を示した。仮設の魚道はホームセンターで手に入る資材を使う。上流を旨すサケやサクラマス、カシカなどを支援する北海道や福井県での活動にも注目が集まった。

「次の一手」に向けた課題の一つとして、自治体の河川管理者との接点が薄い状況の中で協働できる関係をどう創り出すかが議論された。実行委員の一人で兵庫県立人と自然の博物館の三橋弘泰主任研究員は、空海が各地で井戸を掘りながら仏教を広めた歴史に例えながら「地元の自治会や行政の困りごと協力するところから対話を始め、自然再生に引き寄せてみてはどうでしょうか」と提案していた。



7年ぶりに開催されたサミットには全国から約200人が集った。実行委提供、いずれも宇治市の京大宇治キャンパス

宇治でサミット 全国から30団体議論

鴨川にアユ魚道設置

パネルディスカッションでは高校生も登壇し参加者と議論した



2025年12月18日付 毎日新聞京都面



小さな自然再生サミット 2025京都大会 開催報告

2026年2月

【発行】

小さな自然再生サミット実行委員会

【編集】

小さな自然再生サミット2025京都大会 事務局

佐藤充人、白尾豪宏、鈴木敏弘、和田彰（公益財団法人リバーフロント研究所）

〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号 NMF 茅場町ビル 7 階

公益財団法人リバーフロント研究所 内

電話:03-6228-3861 Fax: 03-3523-0640 E-mail: collabosummit2025@rfc.or.jp

URL: <https://www.rfc.or.jp/collaboriversummit2025.html>



小さな自然再生サミット 2025 京都大会
案内ページ